名著國文選 全

3759
5a20
資料室

41750
教科書文庫
4
810
41-1921
20000
43516

資料室
375.9
S20

大正十一年一月十日
文部省檢定濟

佐藤正範編

名著國文選

東京 山海堂出版部藏版

廣島大學圖書
廣島大學教
43516

例言

一、本書は、中等教育の課程を終へて、更に高等專門の諸學校に進まむとする者、及び中等學校にありて國文を溫習せむとする**上級生**、又は**補習科生**等に課するために編纂したるものなり。その目的は、曩に編せる**五名著國文鈔**と異なることなし、

二、本書編纂の目的は、前條述ぶる所の如し。故に國語科智識の基礎となるもの、人口に膾炙せるもの、及び嘗て官公私立高等專門諸學校入學試驗問題たり、又その問題に適する文等を鈔錄せり。而してその**入學試驗問題**たりしものは、その年度竝に學校名を上欄に掲げて、教授者・學習者の參考に資せり。官公私立高等專門諸學校入學試驗に應ぜむとする者は、須らく五名著國文鈔を

學び、本書を熟讀して國語科に關する學力を修養すべし。

三、本書は、年々隨筆・徒然草・鈴屋集・松屋文集・神皇正統記・增鏡・太平記・平家物語・奥の細道・東關紀行・樗牛全集・東圃遺稿を鈔錄し、これを分ちて、隨筆・家集・歷史・軍記・紀行・現代文の六類となす。此等の文は、各獨特の長所ありて、皆國文の模範とすべきものなり。

四、本書は各文章の排列、必ずしも原本の順序に據らず。或は一文の全部、或はその一部分を取り、或は字句の修正をなし、或は句讀點を施し、或は頭注を加へ、或は難語・難句を掲げ、以て教授者竝に學習者の便に供せり。

編者識す

引用書目次

第一類　隨筆類　一

第一篇　年々隨筆……近世……石原正明著……一

第二篇　徒然草……近古……兼好法師著……二

第二類　家集類　三

第三篇　鈴屋集……近世……本居宣長……三

第四篇　松屋文集……近世……藤井高尙著……四七

第三類　歷史類　六一

第五篇　神皇正統記……古……北畠親房著……六一

第六篇　增鏡……近古……作者未詳……七五

第四類　軍記類　九一

第七篇　太平記……近古……小島法師著……九一
第八篇　平家物語……近古……作者未詳……一〇五
第五類　紀行類　一二
第九篇　奥の細道……近世……松尾芭蕉著……一二
第十篇　東關紀行……近古……作者未詳……一三五
第六類　現代文類　一五一
第十一篇　樗牛全集……現代……高山林次郎著……一五一
第十二篇　東圃遺稿……現代……藤岡作太郎著……一六一

引用書目次　終

各篇目次

第一類　隨筆類　一

第一篇　年々隨筆　石原正明　一
第一　文學類……一
一　學の道の心がけ……一
二　隨筆のおもしろさ……二
三　幸ある書……三
第二　處世類……三
四　大和魂顔するわざ……四
五　人の心の見ゆるわざ……四
第三　觀賞類……五
六　櫻花のながめ……五
七　散るぞめでたき櫻花……六
八　上野の岡のながめ……六
九　朝夕のながめ……七
一〇　秋の山ふところ……八
一一　雪の見わたし……八
第四　景物類……九
一二　曉の事ども……九
一三　鳥獸のなく聲……一〇
第二篇　徒然草　兼好法師　一一
第一　序……一一
一　つれづゝなるまゝに……一一
第二　處世類……一一
二　いでやこの世に（願はしきこと）……一一
三　古のひじりの御代（所せきさま）……一三
第三　交友類……一四
四　同じ心ならむ人（同じ心の友）……一四

五　ひとり燈火のもとに（あはれなる卷々）……一五
六　朝夕なれたる人（友に交る道）……一五

第四　勸戒類……一六

七　久しく隔りてあひたる人（物語の戒）……一六
八　何事も人りたゝぬさま……一七
九　或人弓射ること（懈怠の心）……一八
一〇　一道にたづさはる人（德を修むる道）……一九
一一　達人の人を見る眼は……二〇
一二　人の物を問ひたるに（問に答ふる道）……二二

第五　感想類……二三

一三　家居のつきづきしく（家居のさま）……二三
一四　名を聞くより（推し量り）……二四

第六　觀賞類……二五

一五　をりふしの移りかはり（四季の趣）……二五
一六　花はさかりに（花月の見樣）……二九

第二類　家集類

第三篇　鈴屋集　本居宣長　三一

第一　感懷類……三一

一　述懷といふ題にて……三一
二　今の世の文書くさま……三二
三　歌よむ人の心がけ……三三

第二　觀賞類……三四

四　櫻の花を觀て……三四
五　月前の納涼……三五
六　初冬の時雨……三九

第三　記事類……四〇

七　御壁と名つくる記……四〇
八　東路の旅の記……四二

第四　消息類……四四

九　雪のあした友の許に……四四
一〇　加藤千蔭に答ふる書……四六

第四篇　松屋文集　藤井高尙　四七

第一　節物類……四七

一　梅を尋ぬ……四七
二　櫻花のさま……四七
三　花見のさま……四八
四　五月雨のさま……四九
五　夏の月のながめ……五〇
六　秋の山田……五〇
七　菊の色香……五一
八　冬の山家……五二

第二　禽蟲類……五三

九　鶴……五四
一〇　胡蝶……五四

第三　記事類……五六

一一　櫻の屋の記……五六
一二　雨夜菴の記……五七
一三　屋島に行きたる記……五九

第三類　歷史類　六一

第一　發端……六一

一　我が國號……六一
二　天津日嗣……六二
三　書名の次第……六二

第二　神代の卷……六三

四　彥火瓊々杵尊……六三

第三　人皇の卷……六五

五　眞の正道……六六
六　諸の道々……六八
七　賴朝の勳功……六九
八　泰時の德政……七〇
九　人臣の道……七二
一〇　後醍醐天皇の崩御……七四

第五篇　神皇正統記　北畠親房　六一

第六篇　增鏡

著者未詳　七五

一　序……七五
二　後鳥羽天皇の治績……七七
三　水無瀬殿の遊興……七八
四　後鳥羽院の企圖……七九
五　東軍の西上……八〇
六　後鳥羽院の遷幸……八一
七　後鳥羽院の聖德……八三
八　後鳥羽院の回想……八三
九　後鳥羽院の行宮……八四
一〇　師賢卿の叡山登り……八六
一一　師賢卿の笠置參勤……八七
一二　楠木正成の忠勤……八八
一三　笠置の敗軍……八八
一四　大塔宮の武勇……八九
一五　後醍醐天皇の歸途……九〇

第四類　軍記類

九一

第七篇　太平記

小島法師　九一

一　後醍醐天皇の治績……九一
二　俊基朝臣再び關東下向……九二
　(一)事の起因……九二　(二)思はぬ旅……九三
　(三)近江路の旅……九三　(四)番場より……九四
　(五)小夜の中山より九五　(六)大井川より……九六
　(七)清見潟より鎌倉まで…九七
三　大塔宮の熊野落……九八
四　大塔宮十津川の旅……九八
五　後醍醐天皇の還幸……九九
六　正行卿の恩情……一〇〇
七　正行卿等の參內（正行卿等鎧の涙）……一〇一

第八篇　平家物語

著者未詳　一〇五

一　盛者必衰の理……一〇五

二　重盛卿の諫言……一〇六
三　俊寬僧都の痛歎……一〇九
四　高倉天皇の仁慈……一一〇
五　平家の福原落……一一一
六　義經逆櫓を拒む……一一二
七　那須與一の扇の的……一一三
八　後白河法皇大原の御幸……一一六
　(一)人跡絕えたる道一一六　(二)寂光院の趣　一一七
　(三)女院の御庵室…一一八　(四)女院の御見參一一九

第五類　紀行類

一二一

第九篇　奧の細道

松尾芭蕉　一二一

一　旅の用意……一二一
二　江戸よりの旅立……一二二
三　野州の探勝……一二三
　(一)日光山の探勝…一二三　(二)那須の旅路…一二四
四　白河の關の旅路……一二五
五　鹽釜の明神詣……一二六
六　松島の名勝……一二七
七　平泉の舊蹟……一二九
八　出羽の旅路……一三一
　(一)最上の旅…一三一　(二)酒田の旅…一三二
　(三)象潟の風景…一三三
九　越の旅路……一三四

第十篇　東關紀行

著者未詳　一三五

一　序……一三五
二　近江の旅路……一三六
　(一)逢　阪　越…一三六　(二)志賀の古里…一三七
　(三)跡　の　白　波…一三八　(四)野路の篠原…一三八
　(五)武佐寺のあたり一四〇　(六)醒が井の水…一四〇
三　美濃の旅路……一四一
　(一)不破の關越…一四一　(二)株瀨川の宿り…一四二
四　尾張の旅路　熱田神宮……一四三

五　三河の旅路……一四四
(一)八橋のわたり…一四四　(二)本野が原…一四五
六　遠江の旅路　天龍川の渡……一四五
七　駿河の旅路……一四六
(一)梶原が墓…一四六　(二)浮島が原…一四七
八　鎌倉の逗留　都の慕はしさ……一四八
九　鎌倉より歸京……一五〇

第六類　現代文類　一五一

第十一篇　樗牛全集　高山林次郎　一五一

第一　聖教類……一五一
一　世界の四聖……一五一
二　孔子の經歷……一五二
三　孔子の致義……一五五
四　釋迦の經歷……一五六
五　釋迦の教義……一五七

第二　史論類……一五七
六　菅公の詩才……一五七
七　重盛の行爲……一五九

第十二篇　東圃遺稿　藤岡作太郎　一六一

第一　史評類……一六一
一　平家物語の趣味……一六一
二　大人物の戲曲的興味……一六二
三　清盛の運命……一六三
四　平家の末路……一六四

第二　名蹟類……一六五
五　大原の風情……一六五

第三　美術類……一六七
六　平安朝の繪畫……一六七
七　東山時代の繪畫……一六九

目次終

解題

第一類　隨筆類

一、年々隨筆は、全部六卷國文・和歌の名家、石原正明の著なり。正明は、蓬堂と號し、名古屋の人、江戸に住み、塙保己一の高弟たりしが、仁孝天皇文政四年(紀元二四八一年)六十二歳にて沒せり。年々隨筆は享和元年より四年閒に於ける、年々の見聞感想等を述べ、その記する所、學者に益するもの多く、行文、簡淨興味に富む。

二、徒然草は、全部二卷、隨筆文の泰斗、兼好法師の著なり。兼好は、俗名卜部兼好、法名は兼好、嘗て後宇多上皇に仕へて左兵衞門尉たりしが、上皇の崩後出家して、洛西雙の岡に隱退せり。後村上天皇正平五年(紀元二〇一〇年)六十八歳にて歿せり。徒然草は、訓

戒・評論・敍景等二百四十三段の記事あり。文章、優雅精練、奇警の語句に富み、國文中最も多數の人に愛讀せらるゝものなり。

第二類　家集類

三、鈴屋集は、全部九卷、國學の泰斗、本居宣長の著なり。宣長は、鈴屋と號し、伊勢の人、敬神・尊皇・愛國の說を唱へ、識見卓越、文章圓熟して、門人頗る多く、著書約八十種あり。光格天皇享和元年(紀元二四六一年)七十二歲にて沒せり。**鈴屋集**は、宣長の和歌・和文を集めたるものにて、學術・處世・觀賞等、國文研究に益する材料多し。

四、松屋文集は、全部五卷、國學の大家、**藤井高尙**の著なり。高尙は、松屋と號し、備中、吉備津宮の祠官たりしが、宣長の門に入り、後京都に出でて和學を敎授し、著書多し。仁孝天皇天保十一年(紀元二五〇〇年)七十七歲にて歿せり。**松屋文集**は前集・後集あり。序・

跋・敍景・敍事等、多數の優雅なる國文を集めたり。

第三類　歷史類

五、神皇正統記は、全部六卷、吉野朝の忠臣、**北畠親房**の著なり。親房は、後醍醐・後村上の頃、五朝に歷事し、大納言に陞り、三宮に准ぜられ、後村上天皇正平九年(紀元二〇一四年)歿せり。享年詳ならず。**神皇正統記**は、神代より後村上天皇卽位の年に至るまでの記事に、所々議論を交へ、我が皇統の萬世一系にして變ずることなきを論じ、忠誠の氣紙上に溢れ、行文暢達、國文の模範なり。

六、增鏡は、全部十卷、作者詳ならず。或は吉野朝時代頃の人ならむと。**本書**は、後鳥羽天皇卽位の頃より、後醍醐天皇元弘三年までの歷史を記し、老尼の物語を聽者の筆記したる體に作り、所々褒貶の意を寓し、文章、流麗巧緻、趣味に富み、世に三鏡の一に數ふ。

第四類　軍記類

七、太平記は、全部四十卷、小島法師の作なりと。法師の傳記は詳ならず。本書は、花園天皇文保二年より、後村上天皇正平二十二年に至る、五十餘年間に於ける戰亂の狀を記し、所々慷慨の意を寓し、文章、雄大莊重にして、和漢調和文の傑作なり。

八、平家物語は、全部十二卷、作者詳ならず。或は信濃前司行長の作なりといひ、或は葉室大納言時長の作なりといへり。本書は、主として平清盛家を起してより、一族滅亡せし頃までの二十餘年間に於ける、平氏盛衰の狀を記せり。その文、或は優婉、或は悲痛、筆致簡淨、含蓄に富みたる上乘の和漢調和文なり。

第五類　紀行類

九、奥の細道は、全部一卷、俳諧の泰斗松尾芭蕉の著なり。芭蕉は、名は宗房、一號桃青、伊賀の人、江戸に住せり。正風體の俳諧を始めて、門人頗る多かりき。東山天皇元祿七年(紀元二三五四年)五十一歲にて歿せり。奥の細道は、芭蕉が元祿二年三月より同年九月に至る間、日光・松島・平泉より羽州に入り、北陸地方を經て、濃州・勢州に至れるまでの紀行なり。文章は、俳文體にて閑寂幽玄、趣味に富み、紀行文中の傑作といふべし。

一〇、東關紀行は、全部一卷、作者詳ならず。一說に源親行の作なりと。本書は、作者が四條天皇仁治三年八月、京都の宅を出でて東路の旅に向ひ、爾後十餘日間の經路、及び鎌倉に於ける見聞・感想等を記し、文章遒勁にして巧に和漢の故事を引用せり。

第六類　現代文類

二、樗牛全集は、全部五卷、文學博士、高山林次郎の全集なり。林次郎

は、樗牛と號し、羽前鶴岡の人、文學・美術等の著書多く、明治の文壇に名を馳せしが、明治三十五年(紀元二五六二年)三十二歳にて歿せり。**樗牛全集**は、美學・文藝・史傳・思索・雜筆・消息等種々見るべき材料あり。文旨剴切にして筆鋒勁健、現代文の傑作といふべし。

三、東圃遺稿は、全部二卷、文學博士、**藤岡作太郎**の遺稿なり。作太郎は、東圃と號し、加賀金澤の人、篤學勤勉、國文・美術等に關する著書多く、明治四十三年(紀元二五七〇年)四十一歳にて歿せり。**東圃遺稿**は、文學・美術・歴史・傳記・隨筆及び書翰等、趣味ある文多し。旨意適切、行文流麗、現代文の出色といふべし。

解題終

廣島大學圖書之印

名著國文選

第一類　隨筆類

第一篇　年々隨筆　　石原正明

石原正明は、蓬堂と號し、尾張の人、江戸に住み、德川時代の國學者なり。

原本の箇所
○學問に志ある人云々
(大正四年、醫專、入學試驗問題)

異なるふし
ことわりわかぬもあり

第一　文學類

一　學の道の心がけ

學の道に志す人は、古より今に變り來し有樣を、よく知りえむと、心がくべきわざなり。古の事、今より見ては、いと思のほかに、異なるふしあるものにて、事によりては、その移り來しことわりわかぬもあり。さるを唯ひたぶるに、文のうは

おぼ〳〵し　おぼろなる有樣なり。
わざにしあれど
あだごと
まめごと
淺閒　程合の淺きことをいふ。
えんに　艶にの義。美しき有樣をいふ。
こちごちし　骨骨しの義。無骨の有樣なり。

べと、今の世のさまとを思ひ合せて、大方にのみ、心得ゐては、かすめる夜はの月見るやうにて、いとおぼ〳〵しきものなり。そを明めむには、博く書を讀み、おのが考をもよく定めでは、なしえぬことにて、いと難きわざにしあれど、物學ばむとする者は、常にその變りこしさまをよく明めむと、心がくべきものぞかし。（卷の四）

二　隨筆のおもしろさ

隨筆は、人の見聞く事、言ひ思ふ事、あだごともまめごとも、寄り來るまゝに、書きつくるものにしあれば常にはいとよく知りたる事も、ふと忘れては僻事いひ、淺閒なる考どもも入り交り、文の姿もえんにこまやかには、え書き取らで、こちごちしく拙き事などもありて、樣あしきものもあれど、大方つ

心いきざえの程
人の器の限
幸ある書
さはなるを
注釋
處せき
けしうはあらで　怪しうはあらでの義。わるくはあらでの意なり。
さかしだち　賢し立ちの義。賢き有樣をすることいふ。

くろひなきものにしあれば、心いき、ざえの程、人の器の限も見えて、いと〳〵おもしろきものなり。（卷の一）

三　幸ある書

隨筆の中には、徒然草いと幸ある書なり。げにその世には、よろしげなる筆つきとは見ゆめれど、枕草紙などめでたき書もいとさはなるを、それらにもまして、この書の注釋など處せきまで、作りいでもてはやすめり。大方この書は、文の姿などけしうはあらで、兼好のざえの程も見え、げにことわりと覺ゆるふしも多かれど、中には悟りがましく、さかしだちたる事、書きちらしたるもあり。ともかくも、この世の多かる書の中にも、いと幸ある書とこそいふべけれ。（卷の一）

○居所に名つくること

さしはへて　態々にの意なり。

唐國風（からくにぶり）

さうぐしし　さびしく〳〵の轉略語にて、物さびしき有樣なり。

つれなく　氣强くの意なり。

大和魂顔

○もろこし人も云々

人のさが

四　大和魂顔するわざ

すべて何事も、早くより成し來つる事の、我も人も物することは、あしからむとてもいかゞはせむ。さしはへて咎むべきにしもあらず。心づからし出づる事こそ、よく思ふべきことなれ。然るに、この頃、唐國風をいみじう謗る人多く、何事をも唐めきたるを憎みながら、なくてはさうぐしきにや、かりそめにその事のさまをかへて、さらぬ姿にもてなす類のもの多かめり。これ本の根ざしは唐風をうらやみながら、うはべはつれなく大和魂顔するにや。あな心得がたきわざなり。（卷の二）

五　人の心の見ゆるわざ

食物を求むると事好みとは、皆人のさがにこそあるなれ。

品おくれ

羊の羹（あつもの）云々

戰國策、中山篇に、「中山君饗二都士大夫一。羊羹不レ遍。司馬子期怒而說二楚王一、伐二中山一。中山君亡。（中略）中山君歎曰、吾以二一杯羊羹一亡レ國云々」。と見えたり。

一しほ

そが中に、事好みは、はかなき花紅葉につけても、さまぐ〳〵のたしなみありて、歌物語にも常に多く見ゆめるを、食物の事は、品おくれたる心地すればにや、をさ〳〵書ける物にも見えざれど、よろづよりも人の心の見ゆるものにて、羊の羹のために國を滅しゝ類もあり。たま〳〵うまき物を得ては、何がしの友を招きて、すゝめばやと、まづ思ひいでらるゝにも、心の程はあらはるゝものぞかし。（卷の三）

第三　觀賞類

六　櫻花のながめ

花は櫻。さくら多かる山に、松など立ちまじりて、色どりわけたらむやうなるが、一しほ見所あり。友たち四五人ばかり、一とせ嵐山の花見にゆきし事あり。今日ぞ盛ならむと

かつ散る
川そひに
戸無瀬の瀧　嵐山の麓にあり。
（大正十二年、大分高商、入學試驗問題）

散るぞめでたき
古今集・讀人知らずの歌「殘なく散るぞめでたき櫻花、ありて世の中はてのうければ」を指せり。

あへなき心地
唐桐　桐の一種にて、緋桐ともいひ、植ゑて花を賞す。

○上野は時となく云々

覺ゆる程にて、かつ散るもあるに、渡月の橋のこなたを、川そひに南の方にゆく。風のさと吹きあるゝに、雪かとばかり亂るゝ花の、戸無瀬の瀧の岩波に、やがてまがひゆくさまなど、いひしらずをかし。（卷の一）

七　散るぞめでたき櫻花

「散るぞめでたき。」と詠みしもことわりなり。櫻の盛はたゞ一二日三日ばかり、あまりあへなき心地はすれど、又來む春はと心いられして待たるゝも、久しからぬゆゑぞかし。唐桐といふもの、葉のさま涼しげに、花の色いとめでたけれど、夏のなかばより秋過ぐるまで、たゞ同じさまに咲きたるに飽きはてて、とく枯れよかしとさへぞ思はるゝや。（卷の一）

八　上野の岡のながめ

幾千本
嵐山おぼえて
下枝　蓮
追風
（大正十二年、神戸高商、入學試驗問題）

わざとならず
いさよふ月
茜の色　赤色をいふ。茜はもと蔓草の名なり。

上野の岡は時となくよろし。花の幾千本となきが、常盤木に立ちまじりたる、嵐山おぼえてをかし。夏はいと〳〵茂りあひて日影うときに、下枝ひまある方より、不忍の池の蓮、處せう咲きみちたるがほの見ゆるに、追風いと涼しうて、さと匂ひくるいとうれし。紅葉の頃亦いはむ方なし。（卷の一）

九　朝夕のながめ

ゆふべやまさりたらむ。むら雨なごりなく霽れ、いと涼しうて、山のはの雲いと白う、わざとならず處々にかゝれるに、いさよふ月の今出づべきにやあらむ、にほひうつりて見ゆる。あしたやまさりたらむ。峯の松原こき綠なるに、茜の色もゆるやうにて、日の「なからばかりさし出でたる」いとをかし。（卷の一）

山ふところ

ゆほびか　廣やかなる有様をいふ。

いひしらず

麥見の橋　面影橋ともいひ、當時江戸早稲田にありき。

宿り　原書には莊居の字を宛てたり。

すさまじげ

泊舟

篷

一〇　秋の山ふところ

九月の最後　なが月つごもり、神無月ついたち、山ふところの少しゆほびかなるあたりを、ゆくこそおもしろけれ。紅葉の紅なる黄なる、濃き、うすき、匂ある、にほひなき、おのがさまざまの心にて見所多かり。又常盤木の濃き緑なるに、下葉のいひしらず染めたるなどいとをかし。江戸のあたりにては、目黒、姿見の橋、さてはこの品川のわが宿りの園の中。（卷の一）

一一　雪の見わたし

雪はいづくもいづくもをかし。唯海のみすさまじげなり。それも港江の蘆すこしばかり、折り殘したるひまに、泊舟二つ三つ、篷いと白う見ゆるはをかし。市の中は何も目とまる事なけれど、唯雪の朝こそ珍しうをかしけれ。すべていづくも、雪は景色ことに、處變りたる心地して、珍しうをかし。日のさし昇る程起きいでては、往き來なやましきまで、道あしうなりぬべし。いとあぢきなし。とくはき集めよ、取り棄てよなど、言ひさわぐこそあかぬわざなれ。（卷の一）

往き來なやましあぢきなし

ひまもる風

槇の板戸

第四　景物類

一二　曉の事ども

曉いとよきものなり。とく起きいでて書に向ひたる、四方には聊かの物音もなくて、いと心すむわざなり。冬はひまもる風のいと寒きに、埋火かきおこす程、遠山寺の鐘の音、只こゝもとに聞きなさるゝも、いとゞうき世遠き心地ぞする。春は小雨そぼ〳〵と降りて、たえ〴〵なる玉水の、柏の枯葉にかゝる音する。夏は蚊こそうるさけれど、槇の板戸もさ

蟋蟀

（大年六年、東京商大、入學試驗問題）

つぶ〳〵
下の情
雲雀　鴿

公冶長

公冶は姓、長は名、孔子の弟子、鳥語を解せしこと論語集疏に見えたり。

さで置きたるに、二十日の月、酣深くさし入りたる。秋は雁がね、蟋蟀あはれにて、我も共に鳴き明さむとす。かれもこれもいとをかし。（卷の一）

一三　鳥獸のなく聲

鳥獸は、なく聲に遲速・緩急・大小・高低ありて、喜怒哀樂の勢をうつすなるが、つぶ〳〵と物語するばかり、下の情の通ずるものなり。おのがどち通ふ語ありて、なきつゝ物語するにはあらず。鹿・雀・雲雀・鴿・雉などの笛に寄るにてしるし。笛の音に言語あるべきにはあらねど、遲速・緩急高低・大小をうつすがゆゑに、鳥獸もしかぞと思ひて寄るなり。公冶長が鳥語に通じたりといふ說は、よしなき事なり。（卷の五）

兼好法師は、本名卜部兼好、法名兼好、後宇多上皇に仕へしことあり。

つれ〳〵
よしなしごと
ものぐるほし

（一）高位の望
竹の園生
一の人
舍人

第二篇　徒然草

兼好法師

第一　序

一　つれ〳〵なるまゝに

つれ〳〵なるまゝに、日ぐらし硯にむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

第二　處世類

二　いでやこの世に生れては、願はしかるべき事こそおほかめれ。御門の御位はいとやむごとなき。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞ一の人の御ありさまは更なり。たゞ人も、舍人など賜るきはは、ゆゝしと見ゆ。

はふれ
したり顔

その子うまごまでは、はふれにたれど、なほなまめかし。それより下つ方は、程につけつゝ、時にあひ、したり顔なるも、みづからはいみじと思ふらめど、いとくちをし。

（二）法師の戒
人には木のはし云々
清少納言の枕草紙に見えたり。

（二）法師ばかり、うらやましからぬものはあらじ。「人には、木のはしのやうに思はるゝよ。」と、清少納言が書けるもげにさることぞかし。

名聞ぐるし
ひたぶるの世捨人

勢猛にのゝしりたるにつけて、いみじとは見えず。増賀ひじりのいひけむやうに、名聞ぐるしく、佛の御教に違ふらむとぞおぼゆる。ひたぶるの世捨人は、なかなかあらまほしき方もありなむ。

（三）容貌の望かたちありさま
（大正十年、長崎高商、入學試驗問題）

（三）人は、かたち有樣のすぐれたらむこそ、あらまほしかるべけれ。ものうちいひたる聞きにくからず、愛敬ありて言葉多からぬこそ、あかず向はまほしけれ。めでたしと見る

本性
（四）才能の戒
（大正七年、海軍兵學、同十年、長崎高商、入學試驗問題）

人の、心劣りせらるゝ本性見えむこそ、口をしかるべけれ。

（四）しなかたちこそ生れつきたらめ、心はなどか賢きより賢きにも、うつさばうつらざらむ。かたち心ざまよき人も、才なくなりぬれば、しなくだり顔にくさげなる人にもたちまじりて、かけずけおさるゝこそ本意なきわざなれ。

かけずけおさる
（五）學藝交際の道
有職
朝廷武家の禮式典故等に通ずる道をいふ。

（五）ありたきことは、まことしき文の道、作文・和歌・管絃の道、又有職に公事の方、人のかゞみならむこそいみじかるべけれ。手などつたなからず走り書き、聲おだやかにうち語り、いたましうするものから、なほ心へだてぬ交をなすこそよけれ。（第一段）

（一）儉約の道
古のひじりの御世

三　古のひじりの御代

（一）古のひじりの御代の政をも忘れ、民のうれへ、國のそこ

所せきさまうたて

なはるゝをも知らず、よろづに清らをつくして、いみじと思ひ、所せきさましたる人こそ、うたて思ふところなく見ゆれ。

(二)引證

おほやけの奉り物

(二)「衣冠より馬・車に至るまで、あるに隨ひて用ひよ。美麗を求むる事なかれ。」とぞ、九條殿の遺誡にも侍る。順德院の禁中の事ども書かせ給へるにも、「おほやけの奉り物は、おろそかなるをもてよしとす。」とこそ侍れ。（第二段）

第三　交友類

四　同じ心ならむ人　（同じ心の友）

(一)同心の友をかしきことうらなくつゆ違はざらむと

（大正二年、專門檢定試驗問題）

(一)同じ心ならむ人と、しめやかに物語して、をかしきことも世のはかなきことも、うらなくいひ慰まむこそうれしかるべきに、さる人あるまじければ、つゆ違はざらむと向ひ居たらむは、ひとりある心地やせむ。

(二)論爭の友さやは思ふかこつ方

（大正十二年、北海大農、入學試驗問題）

(二)互にいはむほどのことをば、げにと聞くかひあるものから、聊か違ふところもあらむ人こそ、「われはさやは思ふ」など爭ひにくみ、「さるからさぞ」ともうち語らはば、つれ〴〵慰まめと思へど、げには少しかこつ方も、われと等しからざらむ人は、大かたのよしなしごといはむほどこそあらめ、まめやかなる心の友には、遙に隔りたるところのありぬべきぞわびしきや。（第十二段）

わびしきや

（明治四十一年、專門檢定試驗問題）

見ぬ世の人こよなう

あはれなる卷

五　ひとり燈火のもとに　（あはれなる卷々）

ひとり燈火のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするこそ、こよなう慰むわざなれ。文は文選のあはれなる卷々、白氏文集、老子の言葉、南華の篇。この國の博士どもの書けるものも、いにしへのはあはれなること多かり。（十三段）

（大正七年、北海大農、入學試驗問題）

ともある時

今更かくやはげに〳〵しくよき人

六　朝夕なれたる人　（友に交る道）

朝夕へだてなくなれたる人の、ともある時、われに心おき、引きつくろへるさまに見ゆるこそ、今更かくやはなどいふ人もありぬべけれど、なほげに〳〵しく、よき人かなとぞおぼゆる。うとき人のうちとけたることなどいひたる、またよしと思ひつきぬべし。（第三十七段）

（一）謹慎の要

あいなけれ

恥しからぬかは

（二）輕率の語

第四　勸戒類

七　久しく隔りてあひたる人　（物語の戒）

（一）久しく隔りてあひたる人の、わが方にありつることか、ずかずに殘りなく、語りつゞくるこそあいなけれ。隔なくなれぬる人も程へて見るは恥しからぬかは。

（二）次ざまの人は、あからさまに立ち出でても、けふありつ

息もつきあへず

らうがはし

（三）品性の推量

品のほど

わびし

（明治三十九年、金澤醫專、同四十年、仙臺醫專、大正九年、秋田鑛專、入學試驗問題）

（大正十一年、小樽高商、同十二年、長崎高商、入學試驗問題）

ることとて、息もつきあへず語り興ずるぞかし。よき人の物語するは、人あまたあれど、一人に向きていふを、おのづから人も聞くにこそあれ。よからぬ人は誰ともなく、あまたの中にうち出でて、見ることのやうに語りなせば、皆同じく笑ひのゝしる、いとらうがはし。

（三）をかしき事をいひてもいたく興ぜぬと、興なき事をいひてもよく笑ふにぞ、品のほどははかられぬべき。人の見ざまのよしあし、才ある人はその事など定めあへるに、おのが身に引きかけていひ出でたる、いとわびし。（第五十六段）

八　何事も入りたゝぬさま

何事も入りたゝぬさましたるぞよき。よき人は知りたる事とて、さのみ知りがほにやはいふ。片田舎よりさし出で

知りがほにやはいふ
さしいらへ
よにはづかしき方
口重く
（大正十年、東京女高師、入學試驗問題）
（一）師の戒
もろ矢をたばさみ
（大正十一年、長崎高商、入學試驗問題）
得失なく
懈怠の心

たる人こそ、萬の事に心得たるよしのさしいらへはすれ。されば、よにはづかしき方もあれど、みづからもいみじと思へるけしきかたくなり。よくわきまへたる道には、必ず口重く、問はぬ限はいはぬこそいみじけれ。（第七十九段）

九　ある人弓射ること　（懈怠の心）

（一）ある人弓射ることをならふに、もろ矢をたばさみて的に向ふ。師のいはく、「初心の人、二つの矢をもつことなかれ。後の矢をたのみて、初の矢になほざりの心あり。毎度たゞ得失なく、この一矢に定むべしと思へ。」といふ。わづかに二つの矢、師の前にて一つをおろそかにせむと思はむや。懈怠の心みづから知らずといへども、師これを知る。このいましめ萬事にわたるべし。

（二）學者の戒
一刹那
（一）知らぬ道
たづさはる人
あらぬ道
よにわろくおぼゆ
（明治三十四年、高等學校、同三十八年、外國語、大正九年、東京商大、同十年、入學長崎高商、試驗問題）
大正十年、高等檢定試驗問題）
（二）爭はざる
徳
角をがたぶけ
牙をかみ出す

（二）道を學する人、夕には朝あらむ事を思ひ、朝には夕あらむ事を思ひて、重ねてねんごろに修せむ事を期す。いはむや一刹那のうちにおいて、懈怠の心ある事を知らむや。何ぞ只今の一念において、直ちにする事の甚だ難き。（第九十二段）

一〇　一道にたづさはる人　（徳を修むる道）

（一）一道にたづさはる人、あらぬ道のむしろに臨みて、「あはれわが道ならましかば、かくよそに見侍らじものを。」といひ、心にも思へること常のことなれど、よにわろくおぼゆるなり。知らぬ道のうらやましくおぼえば、「あなうらやまし。などか習はざりけむ。」といひてありなむ。

（二）わが「智を取り出で　人に爭ふは、角あるものの角をかたぶけ、牙あるものの牙をかみ出すたぐひなり。人として

は善に誇らず、物と爭はばるを德とす。他にまさることのあるは大なる失なり。

（三）慢心の戒品の高さ

（三）品の高さにても、才藝のすぐれたるにても、先祖のほまれにても、人にまされりと思へる人は、たとひことばに出でてこそいはねども、内心にそこばくのとがあり。慎みてこそがをこにも見えれを忘るべし。をこにも見え、人にもいひけたれ、禍をも招くはたゞこの慢心なり。一道にもまことに長じぬる人、みづから明かに、その非を知るゆゑに、志常に滿たずして、遂に物に誇ることなし。（第百六十七段）

一一　達人の人を見る眼は

（一）達人の人を見る眼は、少しもあやまるところあるべからず。たとへばある人の、世にそらごとをかまへ出して、人

（一）從順なる人そらごと

人をはかる

をはかることあらむに、すなほにまことと思ひて、いふまゝにはからるゝ人あり。あまり深く信を起して、なほわづらはしく、そらごとを心得そふる人あり。又何としも思はで、心をつけぬ人あり。

心をつけぬ人

（二）諸人の行爲おぼつかなくおぼえて

（二）又いさゝかおぼつかなくおぼえて、たのむにもあらず、たのまずもあらで、案じゐたる人あり。又まことしくはおぼえねども、人のいふことなれば、さもあらむとてやみぬる人もあり。又さまざまに推し、心得たるよししして、かしこげにうちうなづき、ほゝゑみてゐたれど、つやつや知らぬ人あり。又推し出して、あはれさるめりと思ひながら、なほあやまりもこそあれとあやしむ人あり。又ことなるやうもなかりけりと、手をうちて笑ふ人あり。

つやつや知らぬ人

ことなるやう

(三)姑息の人とかくのこと

(三)　又心得たれども知れりともいはず、おぼつかなからぬはとかくのことなく、知らぬ人と同じやうにて過ぐる人あり。又このそらごとの本意をはじめより心得て、少しも欺かず、構へ出したる人と同じ心になりて、力を合する人あり。

構へ出したる人

(四)達人の眼識

(四)　愚者の中のたはぶれだに、知りたる人の前にては、このさま〴〵の得たる所、詞にても顔にても、かくれなく知られぬべし。まして明かならむ人の、まどへるわれらを見ること、掌の上の物を見むがごとし。(第百九十四段)

(一)よからぬ答知らずしもあらじをこがましさだかに

一二　人の物を問ひたるに　(問に答ふる道)

(一)　人の物を問ひたるに、知らずしもあらじ、ありのまゝにいはむはをこがましとにや、心まどはすやうに返りごとしたる、よからぬことなり。知りたる事も、なほさだかにと思ひてや問ふらむ。又まことに知らぬ人もなどかなからむ、うらゝかにいひ聞かせたらむは、おとなしく聞えなまし。

(二)通告の戒

(二)　人は未だ聞き及ばぬ事を、わが知りたるまゝに、さてもその人の事のあるさましさなどばかり、いひやりたれば、いかなる事のあるにかと、おし返し問ひにやるこそ心づきなけれ。世にふりぬる事をも、おのづから聞き洩す事もあれば、覺束なからぬやうにつげやりたらむ、あしかるべき事かは。かやうの事は物なれぬ人のあることなり。(第二百三十四段)

(明治三十五年、高等學校、大正八年、北海大農、大正七年、京都蠶業、同九年、東京蠶絲、入學試驗問題)

心づきなけれ世にふりぬる事

あしかるべき事かは

第五　感想類

一三　家居のつきづきしく　(家居のさま)

(一)好き住宅つきづきしのどやかに

(一)　家居のつきづきしくあらまほしきこそ、假の宿りとは思へど、興あるものなれ。よき人の、のどやかに住みなした

（明治四十年、高等學校、同四十一年、東京女高師、入學試驗問題）

（二）觀察の事

わざとならぬ庭の草

心にくし

えならぬ調度

前栽の草木

ことざま

る處は、さし入りたる月の色も、一きはしみ〴〵と見ゆるぞかし

（二）今めかしくきらゝかならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子・透垣のたよりをかしく、うちある調度も昔おぼえて、安らかなるこそ心にくしと見ゆれ。多くのたくみの心を盡してみがきたて、唐の大和のめづらしく、えならぬ調度どもならべおき、前栽の草木まで、心のまゝならず造りなせるは、見る目も苦しくいとわびしさてもやは長らへ住むべき。また時のまの煙ともなりなむとぞ、うち見るよりも思はるゝ。大かた家居にこそ、ことざまは推し量らるれ。（第十段）

一四　名を聞くより（推し量り）

（一）己の推量

（大正十年、北海大農、入學試驗問題）

思ひよそへらる

（二）確ならぬ覺

いつぞやありしが

（一）名を聞くより、やがておもかげは推し量らるゝ心地するを、見る時は又かねて思ひつるまゝの顏したる人こそなけれ。昔物語を聞きても、この頃の人の家の、そこほどにてぞありけむと覺え、人も今見る人の中に思ひよそへらるゝは、誰もかくおぼゆるにや。

（二）又いかなる折ぞ、只今、人のいふことも、目に見ゆるものも、わが心のうちも、かゝることのいつぞやありしがとおぼえて、いつとは思ひ出でねど、まさしくありしこゝちするは、われば かりかく思ふにや。（第七十一段）

第六　觀賞類

一五　をりふしの移りかはり（四季の趣）

（一）をりふしの移りかはるこそ、ものごとにあはれなれ。

（一）春の趣

をりふし

ものゝあはれ（大正十年、神宮、入學試驗問題）

けしきだつ程

心あわたゞしく

花橘は云々　伊勢物語、在原業平の歌「五月まつ花橘の香をかげば、昔の人の袖の香ぞする」に基けり。

（二）夏の趣

灌佛　四月八日の佛生を指せり。

祭　四月の中の酉の日に行ひし賀茂の祭を指せり。

「もののあはれは秋こそまされ。」と、人ごとにいふめれどそれもさるものにて、いま一きは心も浮き立つものは、春のけしきにこそあめれ。鳥の聲などもことのほかに春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草萌え出づる頃より、やゝ春深く霞みわたりて、花もやう〳〵けしきだつ程こそあれ、折しも雨風うちつゞきて、心あわたゞしく散り過ぎぬ。青葉になりゆくまで、よろづにたゞ心をのみぞなやまし。花橘は名にこそおへれ、なほ梅のにほひにぞ、いにしへのことも立ち返り、こひしう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさまなどしたる、すべて思ひ棄てがたきこと多し。

（二）灌佛の頃、祭の頃若葉の梢すゞしげに茂りゆく程こそ、「世のあはれも、人のこひしさもまされ。」と、人の仰せられしこそげにさるものなれ。さ月あやめふく頃、早苗とる頃、水鷄のたゝくなど心細からぬかは。みな月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。

六月祓　六月の晦日に行ひし大祓のことなり。

（三）秋の趣

棚機祭る

野分のあした

腹ふくるゝわざ

あぢきなきすさび

（三）棚機祭るこそなまめかしけれ。やう〳〵夜寒になるほど、雁鳴きて來るころ、萩の下葉色づくほど、わさ田刈りほすなど、とり集めたることは秋のみぞおほかる。又野分のあしたこそをかしけれ。いひつゞくれば、皆源氏物語・枕草紙などに事ふりにたれど、同じことまた今更にいはじとにもあらず。おぼしき事いはぬは、腹ふくるゝわざなれば、筆にまかせつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやり棄つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

(四)冬の趣をさ〳〵

遣水

(五)歳暮の趣

御佛名　十二月十九日より三日の間、宮中にて行はれし佛事をいへり。

荷前の使　朝廷より十陵八墓に幣帛を奉られし使をいふ。

(六)大晦日と元旦との趣

追儺　十二月大晦日に行はれし鬼やらひをいふ。

(四)さて冬枯のけしきこそ、秋にはをさ〳〵おとるまじけれ。汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白うおける朝、遣水より煙のたつこそをかしけれ。

(五)年の暮れはてて、人ごとに急ぎあへる頃ぞ又なくあはれなる。すさまじきものにして、見る人もなき月の寒けくすめる、二十日あまりの空こそ心細きものなれ。御佛名、荷前の使たつなどぞ、あはれにやむごとなき。公事どもしげく、春のいそぎに取り重ねて、催し行はるゝ樣ぞいみじきや。

(六)追儺より四方拜につゞくこそおもしろけれ。つごもりの夜いたう暗きに、松どもともして、夜半過ぐるまで人の門叩き走りありきて、何事にかあらむ、ことゞ〳〵しくのゝしりて、足を空にまどふが、あかつき方より、さすがに音なくなりぬるこそ、年のなごりも心細けれ。亡き人の來る夜とて、魂祭るわざは、この頃都にはなきを、あづまの方には、猶することにてありしこそあはれなりしか。かくて明けゆく空のけしき、きのふにかはりたりとは見えねど、引きかへめづらしき心ちぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかにうれしげなるこそまたあはれなれ。(第十九段)

年のなごり

魂祭るわざ

一六　花はさかりに　(花月の見やう)

(一)花月の見樣

たれこめて(大正二年、山口高商、同八年、桐生高工、北海大農、同九年、長崎高商、入學試驗問題)

歌の詞書

まからで

(一)花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。雨にむかひて月をこひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれになさけ深し。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ見所多けれ。歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、早く散り過ぎにければ。」とも、「さはる事ありてまから

で。」なども書けるは、「花を見て。」といへるに劣れることかは。

（二）花の散り、月のかたぶくを慕ふ習はさることなれど、こ

（二）花月の深趣味

とにかたくなる人ぞ、「この枝かの枝散りにけり。今は見所なし。」などはいふめる。望月のくまなきを、千里の外まで眺めたるよりも、曉近くなりて待ち出でたるがいと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、うちしぐれたるむら雲がくれの程、又なくあはれなり。椎柴・白樫などの、ぬれたるやうなる葉の上に、きらめきたるこそ身にしみて、心あらむ友もがなと、都こひしうおぼゆれ。

（大正六年、米澤高工、入學試驗問題）

かたくなる人

（三）すべて月花をば、さのみ目にて、見るものかは。春は家を立ち去らでも、月の夜はねやの中ながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。（第百三十七段）

（三）精神的觀察法

（明治三十五年、千葉醫專、同三十九年、名古屋高工、入學試驗問題）（大正十一年、高等檢定、同十二年仙臺高工、入學試驗問題）

うちしぐれたる

第二類　家集類

第三篇　鈴屋集

本居宣長

第一　感懷類

本居宣長は、伊勢の人、號し、德川時代國學の泰斗たりき

一　述懷といふ題にて

（一）昨日は今日の昔にて、はかなくのみ過ぎにすぎゆく世の中を、つく〴〵と思へば、あはれわがよもいく程ぞや。手ををりて數ふれば、はや三十ぢにもあまりにけり。命長くて七十八十生けらむにてだに、早くなかばは過ぎぬるよと思へば、まだよごもれるやうなる身も、行先程なき心地のして、心ぼそくぞおぼゆる。

（一）歲月の過ぎ易きことはかなく

（大正九年、神宮、同十年、東京商大、入學試驗問題）

よごもれるやうなる身

（二）かくのみはかなく、心なき木草鳥獸の同じつらに、何す

（二）吾が短所

（大正十年、高等學校、入學試驗問題）

（大正十年、神宮、入學試驗問題）
同じつら
生けるかぎり
いたり少く

人に似ぬ愚さ

（三）將來の覺悟
えうなきもの
はふらかし
ゆゑづけて
なのめに
あいな賴み

○消息文例の序

としもなく明し暮しつゝ、生けるかぎりのよをつくして、徒に苔の下に朽ちはてなむは、いと口惜しく、いふかひなかるべきことと思ふにも、よろづにいたり少く、つたなき身にしあれば、何事をしいでてかは、世の人にも數まへられ、なからむ後の世に、朽ちせぬ名をだにとゞめましと、いとゞ人に似ぬ愚ささへとりそへてぞ、悲しく心うかりける。

（三）さりとてはた、身をえうなきものに、はふらかしはつべきにしもあらず。かくのみつたなく愚なる心ながら、何わざにまれ、怠なくわざと心に入れて勉めたらむに、つひには一つゆゑづけて、なのめにしいづるふしも、などかはなからむと、あいな賴みにかゝりてなむ。（卷の七）

二　今の世の文書くさま

（一）拙き歌文
ひが〳〵し

（二）品なき文
みやびぶみ
消息文

艶だちけしき
ばめる事
品なくこちな
く
かたはらいた
きわざ

○中里常岳に答へたる詞

（一）新古今の
趣
むねと
新古今の集

（一）今の世の物學びの人は、おしなべて歌よむ事も、文かく事も、いと拙くて言葉遣ひがゝしく、心しらひあやしくさとびたるなど、すべて古に違へるふしのみ多かりけり。

（二）中にも文かく事は、殊に拙くて、更に古のみやびぶみのさまをば、え知らぬ中にも、消息文などはしも、むげにたどたどしきさまにて、皆いとをさなき口つきなるを、おのがじしは心をやりてさすがに艶だちけしきばめる事うち交ぜたるなど、なか〳〵にいと品なくこちなく、かたはらいたきわざになむありける　（卷の九）

、三　歌よむ人の心がけ

（一）世の人の歌の道に志してものせられむには、むねと新古今の集に心を入れて、勉められむこそよからめ。そもそ

も歌は、萬にまさりて難きわざなるを、かの集のさまは、難きが中にもかたきさまにしあれば、たやすくは成し得べきにあらざれとも、かの集の頃の歌人も人我も同じく人なれば、たえて及ぶまじきやうやはあるべき。

(二)成業の道　天つ空にもかけりてむほどく

(二) 萬のわざは、天つ空にもかけりてむと、初より心を高く強くつかひて、怠らず勉めぬれば、遂にほど〳〵になしえぬわざは、なきものぞかし。（卷の七）

第二　觀賞類

四　櫻の花を觀て

(一)櫻の花盛　百に千に　けやけく

(一) 春山の櫻の花の盛を、つら〳〵見つゝ思へらく、類なき花はこの花、百に千に花は咲けども、花はこの花うつくしきかもたふときかも。（卷の六）

こちたく　またなく

(二)稱へたる詞　岡部の大人　賀茂眞淵翁を指せり。　うべなることゝ

たゞはあらずて、淺らかに覺ゆるものからたぐひなきにほひをそなへて、またなくみやびたることの、言ひもかね、名づけもしらぬは、この花になむありける。

(二) されば、わが學の親なる岡部の大人の、この花の物よりすぐれて、異なるさまをたゝへて、これぞこの大御神國の道ののどけき姿なりと、のたまへりしは、げにうべなることぞかし。（卷六）

五　月前の納涼

(一)炎暑　處せきほど　照りはたゝく　紛さばや

(一) みな月の二十日の程、大方もこの頃は、暑さ處せきほどなるを、まいて朝より塵ばかりも曇なく、照りはたゝく日影の、西日になる程、よに堪へがたくて思ふどちうちとけたる物語をだにして、紛さばやと思ひて、むつまじくあひ語らふ

友どちのもとに物しつ。

(二)　なき程にやあらむと、おぼつかなく思ひしもしるく、今日は物へなむまかりぬるといふに、いと口惜しくて、歸りなむとするほど、このあるじ歸り來て、まづ見るより、今日の暑さをかへす〳〵言ひつゞけ、汗おしのごひ、扇うちならしつつ伴ひ入る。南おもてなる處、伊豫簾かけわたし、あたりあたり、いとさはらかにしつらひたる、いと涼しげなるに、夕風待ちとるべき端つ方についゐたるに、かつ〴〵暑さも忘るる心地して、簀子のはしに出でて見出せば、庭の梢ども、いづれとなく茂り合ひたるものから、木立うとましからぬ程につくろひなして、このもかのもに、はかなき柴垣なつかしく結ひわたしたるなど、しめやかに見所あるさまなり。

(二)庭の　所思ひしもしるく

さはらかに

かつ〴〵

簀子

このもかのも

(三)物語の興　呉竹の下風　あかぬ心地

さうゞし

かしこまり

無禮の罪

(四)燈火の影　夕立のなごり　おぼえて

内外

(三)　夕つけゆく程、軒近き呉竹の下風心もとなき程にうちそよめきたるも、あかぬ心地のみぞせらるゝ。やゝありて、同じ心なる人、また二人三人なむ來あひたる。さうゞしかりつるに、いとうれしくて、はかなき物語も、いま一きは心ゆくこゝちす。「心へだてぬどちのまとゐ、なべてうちとけたるなむよきを、ましてかく暑きには、いかでかしこまりもおきあへ侍らむ。無禮の罪はゆるされなむ」とて、ほとほと帶なども解きちらしぬべし。

(四)　主なさけある人にて、庭の立石などに水そゝがせたる夕立のなごりおぼえて、木々の下枝うち靡きて、落つる雫も、いひしらず涼しく見ゆ。やう〳〵内外暗くなりゆくに、さやかなる童の出で來て、燈火近くともせば、「いでや、けぢか

くていと暑かはし。今宵は燈籠にてはありなむ　この火消ちてよ。」といふ。「げにさも侍らむ」とて、立ちていぬる程もなく、前栽の茂みに立てるに、火いれたるほのかなる影に、青葉の露きら〳〵と見えて、同じく吹く風も、ことに涼しくぞおぼゆる。

前栽の茂み

（五）夏の月なき程は、庭の光なき、いとむづかしく覺束なきものなるに、この光なからましかば、いと物のはえなからましを。」とて、皆人めであへるに、主のしたり顔なるもことわりなりかし。かくて宵過ぐる程、小高き松にほのめく影は月出でたるならむとて、東の妻戸おし開きて待つほど、とばかりありて、いと花やかにさし出でたるは、又似るものなく、涼しく面白きには、燈籠の火も今ぞむとくに消たれにたる。

（五）光の美　むづかしく物のはえしたり顔

妻戸おし開き

無德

むとくに

古川のべの云云

新古今集、藤原有家の歌、「涼しさは秋やかへりてはつせ川、古川のべの杉の下蔭」に基けり。

（六）總束

ものむづかしさ

風さへいと冷かにうち吹きたるは、古川のべの杉の下蔭ならねど、「秋やかへりて」など、うち誦しのゝしる。

（六）大方、月は秋をこそめでたき時に、古よりいひおきたるなれど、この頃の空にかくて待ち出でたる程よ、たとしへなく心も澄みて、ものむづかしさも、こよなく紛るゝわざになむ。（卷の七）

六　初冬の時雨

（一）かんな月の初、ものに行きけるに、日いと短き頃、やゝ遠き處にしありければ、急ぎつれど、かへさはとく暮れにけり。

（二）夕月の影に、玉笹の霜の處せくおき渡したるが、きらきらと見えたるなど、なか〳〵をかしき冬枯の野邊のけしき、闇ならましかば口惜しからましと思ふにも、入方近くかす

（一）日暮の頃

かへさ

（二）時雨の樣

玉笹の霜

あかぬ心地

はしたなく

しとゞにぬれ

(三)雨霽る

傘やどり

わりなきわざ

○稲掛棟隆が家の業のみかべの詞

かなる光の、いとあかぬ心地するに空さへ俄に曇りて山の端ならで月もかくれ、いみじく暗くなりて、風あら〳〵しく吹き來ぬるは、げに定めなき、この頃の空のけしきかなと見るに、はしたなくうちしぐれきぬれば、足を空に走りかへる程しとゞにぬれぬ。

(三)　何とはわかねど、いと大きなる木の立てるを見つけて、しばしの傘やどりと頼む蔭さへ、いたく散り過ぎにたれば、雨たまるべくもあらぬぞ、いとわりなきわざなりける　しばしのほどに、なごりもなく霽れぬれど、月は早く入りにけり。(卷の七)

第三　記事類

七　御壁と名つくる記

(一)豆腐の名家の業

雅名

ふさはぬ

あらせてしが

(二)御壁の命名

なまめき

ことさらびて

白土

みかべ

(一)　稲掛の棟隆は、遠つ祖の世よりの家の業とて、諸人のめでくふ豆腐といふものを造りて賣りけるが、年頃思へるは、この物よ、雅名の聞え來ずて、よにあやしき唐名をのみ呼びあへることそいとも、ふさはね。いかで佳き名をあらせてしがと、時々にいひもいでつゝ、かこつなりと聞きけり。

(二)　おのれ、はたうべなりと思ふに、いでや近き世の習、物の名つくるに、花や雪やとなまめきたるすぢを、わざとえり出でたるもことさらびて、なか〳〵にゆかしからず。只何とはなしに、古めきたることそみやびてはあれと、かにかくに思ひめぐらして、かの白土もてぬりたるものを思ひよせたるをみな言葉を古ざまにいひなして、「みかべ」とよばば、いかにあらむと、棟隆にし語らへば、それいとよけむと、手うちてぞ

めでよろこびける。（巻の六）

八　東路の旅の記

（一）勢州より三州までの旅

（一）これかれ伴ひて、伊勢の國何がしの里を、曉の空に立ちいでて、鳥がなく東の旅に赴きける。頃は霜月の十日あまりの事になむありければ、旅衣の袖ふく嵐も、いとゞ身にしみてもの心細きに、山の梢、道のべの草葉も、冬枯れわたれるけしき、いとあはれになんがめやられ、海づらによせ返る波さへ、我もいつかはと、げに羨しく覺えつゝ、玉笹の野べの假寢も、一夜二夜と重れば、故郷もやうゝ遙になるみの浦を過ぎて、三河の國にもなりぬ。在原の中將の唐衣の言葉のはるけき昔の跡たえぬ八橋も、程近しとき、けど、燕子花の花の折にもあらざれば、すさまじく思ひ隔てて過ぎぬ。

鳥がなく東

玉笹の野べの假寢

唐衣の言葉　伊勢物語、在原業平の歌「唐衣きつゝなれにしつましあれば、はるゝ來ぬる旅をしぞ思ふ」を指せり。

（二）遠州路の旅

とほつあふみ

はじめたる旅

いつしかと

心もとなくて

あやにくに

いぶせく

（三）富士山の景

（二）遠江の國なりといふを聞きて、一人がよめる、

故郷は　とほつあふみと　きくからに
ふじの高嶺や　ちかくなるらむ。

誰も〳〵この東路は、まだはじめたる旅になむありければ、富士の山見むことをなむ、いつしかと心にかけて、旅のものの悲しさもうち紛るゝやうなるに、この頃の空、雪げにのみうち曇りつゝ、いと心もとなくて、過ぎゆくほどに小夜の中山も晝の程に越えすぎて、音に聞きにし大井川も水いと淺く、袖つくばかりにて、心やすく渡りぬ。今日はあやにくに、霽れやらぬ空、いといぶせくて、富士も見えず。日も暮れぬれは、宇津の山近き里に宿りぬ。

（三）行き〳〵て清見が崎に駒を留めて、三穂の松原うち眺

やすらふ
はるけき雪の中空

めやりつゝ、暫しやすらふに、今ぞやう〳〵霽間見えそめて、はるけき雪の中空に、あやしき物なむ現れたる。綿などを積みあげたらむやうに、眞白にいと高く見ゆ。人々あきれて、しばしはそれとも思ひ知られず。やう〳〵形の見えゆくにぞ、見ざりし山なりとは知られける。（卷の七）

第四　消息類

九　雪のあした友の許に

（一）今朝の景色めづらしくは御覽ぜずや。冬になるよりいつしかとのみ、日ごとに待ちわたり侍りしに、昨日のゆふべ風いたく吹きあれ、雲のたゝずまひも、いみじくさえ渡りて、飛ぶ鳥のけしきまで、必ず降りぬべき空とは見給へしかど、いとかくまで深くとは、思ひ給へかけざりきかし。

（一）今朝の景
雲のたゝずまひ

（二）交友の興
かゝらぬ折だに
朝ぼらけ
心なき身
あたらしく
（大正十二年、長崎高商、入學試驗問題）

（二）明暮心へだてぬ友どちは、かゝらぬ折だに、何事につけても、まづ思ひ給へ出でらるゝわざなるを、ましてかくめづらかなる朝ぼらけを、心なき身のひとりのみ見侍らむことの、いとあたらしく思ひ給ふれば、よし跡つけても、人のとひ給はましかば、とよなくをかしさも、まさりぬべきものと思ひ給ふるに、いかにとだに、おとづれもし給はぬは、いと思はずにうらめしくなむ。この景色さりとも見過しがたくは、おぼさるらむものをとは、思ひやり聞えさすれど、しろし召すやうに、いとうひ〳〵しき口には、何事も言はれ侍らず。筆のしりとる博士だに侍らで、とりつくろはむやうも侍らねば、思ひ給ふる程の心もたゞおしこめてなむ。

うひ〳〵しき口
筆のしりとる博士

（三）返信を需む

（三）そこには、いかに見所ある、心深き言の葉多くものし給

さうさうしさ
あやしき鳥の跡
あなかしこ

ふらむ。一つ二つたまはせよかし。さてなむせばき庭の雪の光も加りて、友なき今朝のさうさうしさもなぐさめ侍らむ。いでやかく聞えさするも、本よりあやしき鳥の跡の、今朝はいとゞ筆の先しみ凍りて侍れば、御覽じわくかたも侍らずや。あなかしこ。（卷の七）

一〇　加藤千蔭に答ふる書

ことぶき申す
ふりはへ
鶯の初聲より
けに
友なし千鳥

まづとよ平かに物し給ひて、めでたき御齢重ねあげ給へらむ年の始の喜、なほ八千代にとことぶき申す。こゝにも事なくてなむ。こぞの冬はふりはへさせ給へる御書よ。またきに春や立ち返りきぬる心地して、鶯の初聲より、けに、珍しくうれしくなむ。伊勢の海邊の友なし千鳥、涙の立ち居に、東の空のみなつかしくなむ思ひわたり侍る。（卷の七）

藤井高尚は、松屋と號し、備中の人、德川時代の國學者なり。

（一）情ある主とめこかし云云
新古今集、西行法師の歌、「とめこかし梅さかりなるわが宿を、うときも人はをりにこそよれ」を指したり。片山陰

（二）歌を誦する者うときも人は云々
前の歌の中にある句なり。

（一）木草の花

第四篇　松屋文集

藤井高尚

第一　節物類

一　梅を尋ね

（一）求めて来い梅の盛りの我が家を
とめこかし、梅さかりなる我が宿を。」と、なにがし法師のいひけむやうに、なさけある主もがな、訪ひて見ばやとて、片山陰を行くに、竹編める垣しわたして、さる人の住家ならむと覺ゆるあり。

（二）立ち寄りてのぞくに、賤しげならぬ人、松の柱に寄りそひ、梅の香をかしきを見出して、「うときも人は。」と、うち誦したり。うれしともうれし。（卷の上）

二　櫻花のさま

（一）春くれば咲かざりし木草の花も、數多さきいづる中に、

かずまへいふ

それかれとかずまへいふ限はさらなり。名も知らぬも、をかしう見ゆるは、をりからなめり。

（二）櫻花の美

いひしらぬあだし時にからむやはなのめ

（二）あるはいとよく晴れたる朝日の、のどかなる影に匂ひてあひて、ひときは美しう、あるは霞める月の影の心にくきに、ほの〴〵見ゆるがいひしらぬなど、あだし時にかゝらむやは。さるをかしき折に、また類なき櫻の咲き出でたるよ。いかでかはなのめならむとぞ。（後集、巻の中）

三　花見のさま

心ならぬ春あらましごと心ゆくまで

（一）花さかばあけくれ野山にまじりなむと、あらましごとにはいへど、その頃になりぬれば、あやにくに雨なども降り、又さらでも世にふる業のいとまなくて、いつの春かは心ゆくまでは見し

（二）櫻狩の遊

しめのうち

ふりはへ

（二）今年も例の何くれとさはりがちにて思ひ立ちながら日頃のふるを、さのみやは春の行方を知らでであるべきと、思ふどちかたみにそゝのかしつゝ出でたつ。しめのうちなるは、かくふりはへねど、御社に詣づる旅の行手にも、おのづから見る折あれば、けふは遠き處のをこそと、野行き山行き行きくれて、花の宿かせ野邊の鶯」と、折にあひたるふることを、聲々に歌ひ歸りしこそをかしかりしか。（後集、巻の中）

四　五月雨のさま

花の宿かせ

新古今集、藤原家隆の歌、「思ふどちそことも知らず行きくれぬ、花の宿かせ野邊の鶯」を指せり。

○閑中五月雨

葎の宿

いぶせさ

言種

よろぼひ

葎の宿はさらぬ時だにさびしきならひなるを、五月雨の日をふれば、いとゞいぶせさもまさりて、ひたぶるに空をのみうちながめつゝ、霽間なしやといふぞ、この頃の言種なりける。程なき庭に、草も高くなり、柴垣などもうちよろぼひて、

はかなき宿の光

たゞ軒にかけたる蜘の糸に、玉をぬきとめたるのみぞ、はかなき宿の光にて、いさゝかつれ〴〵まぎるゝ見物になむありける。（巻の上）

五　夏の月のながめ

月は秋をよしとするは、空のすみて光まされるゆゑにて、げにその方はたぐひなけれど、やゝ夜寒にて、たくるまで端居に見む事、堪へがたき折もあるを、夏の月ばかりいみじきはなし。待ちわたる風も、その桂の蔭やゝどりならむ、出づれば必ず吹き来て、影のえならぬと涼しさと、あひにあひぬれば、例の夕まどひも忘れてぞ。（後集、巻の中）

たくるまで端居に見む事

桂の蔭

六　秋の山田

（一）秋の山田は夜こそことにさびしきものの、さすがにをかしくはあれ。あやしの小屋に、賤の男が起き居て、ひたひきならしつゝ、鹿猿おどろかし、谷水の流にかけたるひたの、おのれと音するなど、とりあつめてあはれなること多かり。

○秋の田

（一）秋のあはれ

（二）かく心を盡してもるとはすれど、暁近うなりては、うちまどろむにやあらむ、物の音なひもたえ〴〵なれば、小屋近く鹿のより来つゝ、何のかひよとうちなきたるは、いぎたなさをいさめ顔なりや。（巻の上）

さすがにをかし

ひた　引板をいふ。

（二）鹿の鳴く聲

かひよ　鹿の鳴聲なり。

いぎたなさ

七　菊の色香

（一）山路の菊たづねみむとて、谷にそひて登る。さかしと

○岸の菊

（一）菊の花の盛

さかし

いふばかりの道にはあらねど、ならはぬ山蹈はくるしうて、あへぎつゝ行くに、やう〳〵水の音すみまさりて、流のいさぎよう見ゆれば、心とまりて岩根におりて、手にむすびなどあへぎつゝ

何がしの谷　菊花にて名高かりし南陽郷縣の甘谷を指せり。

思ひしもしるく

（二）處のさまつゆのま

○山館冬到る

（一）殘の紅葉　神無月　神嘗月の宛字なりといふ。

さゝ垣のひま

するに、あやしういとかうんばしきは唐土にありきと音に聞く、何がしの谷のたぐひにやあらむと思ふに、いとゞ水上ゆかしうて、流につきて登りゆけば、思ひしもしるく、此方彼方の岸に、菊いと多く咲き亂れたり。

（二）花の色香はさるものにて、處のさまも世の常ならず。仙人（やまびと）のかならず通ふべき處と見ゆれば、つゆのまと思ふがうちにも、千歳や經ぬらむかし。（卷の上）

八　冬の山家

（一）神無月のついたちの日、昨日の秋の名殘を慕ひて、殘る紅葉をもたづねみがてら、ある人の山住を訪ふに、柴の戸閉ぢて人げも見えず。さゝ垣のひまよりのぞけば、苔むせる庭に紅葉散りしきたり。このすまひこそ羨しけれと暫し立てるに、後より人のくる音す。顧みれば、あるじの落栗拾ひて歸れるなりけり。

（二）時雨の樣　冬立つ日なるもしるく

（二）いたう喜びて、いざ此方にと誘ひ入れて、かくて住む程のものがたりす。珍しく聞き居たるに、冬立つ日なるもしるく、時雨の降る音の聞ゆれば、外の方を見いだすに、山風あらあらしく吹きて、四方の木の葉の散り亂るゝにぞありける。

（三）をかしき設　炭櫃

（三）今日だにかゝりまして冬深くなりて、雪霰がちならむ折ぞおもひやらるゝ。あるじ炭櫃に火おこして、かの栗を燒きて、箱の蓋におきて、さしいだしたるも、さる方にをかしき設のさまなりかし。（卷の上）

さる方にをかし

第二　禽蟲類

さだかに
上のきぬ
やむごとなげ
羽衣の色雪は
づかしく

九　鶴

鶴は空高く飛ぶも、翅こそさだかに見えわかね、しづかなるさまいとしるし。まして開近くおりゐたるは、たとへばよき人の冠、上のきぬきて立ち給へるに似て、いと〳〵やむごとなげに見ゆかし。羽衣の色雪はづかしく、額の限り赤きを、千年經にけるなりといふは、仙人（やまびと）の數へ知りて、いひそめけることならむとぞ。（卷の上）

(一)胡蝶の故事
莊周が云々
莊子が夢に胡蝶に化せしこと、莊子の齊物論に見えたり。
見るめもいと美しく

一〇　胡蝶

(一) 莊周が夢の中に身をかへて、胡蝶となりきといへるは、もとよりそらごとながら、をかしきふることとて、昔より歌にも文にも作りあへり。さるは胡蝶といふもの、見るめもいと美しく、名さへにくからぬゆゑぞかし。簑蟲などになりたる夢語ならばかゝらむやは。

(二)亂れ飛ぶ蝶
木がくれ
花にすだきて

(二) 花園にはじめは三つ四つと、數ふるばかり稀に見えしも、いづくよりか來つらむ、あまたになりて空に飛び、木がくれを行く。あしたには露にぬれて、小き羽もおもきにやあらむ、立ちかねて、なほ花びらにすがりて眠りゐたるに、風のさと吹きくれば、驚きて亂れ飛び、ゆふべには寢所を爭ふにやあらむ、こゝかしこの花にすだきて、立居ひまなきが、踊るやうに見ゆるなどいとをかし。

(三)美しき蝶
あひ〳〵て
あてに
とめ來てむつるゝは

(三) ましてやむごとなきわたりの、前栽の花にすみて、玉垂近く飛びありきたらむは、あひ〳〵て額つきも羽衣も、一きはあてに美しうぞ見ゆらむかし。すべて花といへば、一つ二つ咲きたるをも、あながちにとめ來てむつるゝは、あやし

すきもの

(一)櫻の匂心を得る

たぐふ

もてはやされたるも

黄昏

艶に

(二)主人の風雅

御里　京都を指せり。

きすきものになむ。（卷の上）

第三　記事類

一一　櫻の屋の記

(一)　花といへば櫻の事と、人皆心を得るやうになりぬるは、花の多かる中に、すぐれてたぐふべきが、更になきゆゑなるべし。げに晴れたる月に、花の色のもてはやされたるも、深く霞める影の心にくきに、なつかしう匂へるも、いひしらずをかしく、故ある黄昏、たゞならぬ朝ぼらけにも、櫻の花見るばかり、艶におもしろき事やはある。

(二)　御里にこの花の木のよしあるを菴に植ゑて、その住家を櫻の屋といふあり。あるじは七里蕃民とて、おのが都にまゐりては賴む人、その人柄は、いはずとも知られたることぞかし。櫻の花を深くめづる雅人なれば、なつかしうなさけ深う恥しげに、心の奥おほかりげなるもことわりになむ。

雅人

恥しげに

(三)御國風の美趣

御國風

(三)　又こゝの古事學び好めるも、あひにあひたる事とぞ思はるゝ。さ思ふはこの櫻といふ木は、とつ國には一本だに生ひずと聞くが上に、花の色の美しさ、御國風のみやびたるさまに、いとよう通ひて見ゆればなり。かくいふ家は、錦の小路よりは少し北、新町といふまちにありて、朝日のかどにさし出づる處。（後集卷の上）

一二　雨夜菴の記

(一)　しめやかなる宵の雨には、思ふどちの物語も常よりことに言ひつゞけらるゝ樣の、物に見えたるは、げにさることぞかし。獨り居ても、燈火をかゝげて書どもを見、歌おもひ

(一)宵の雨の趣

思ふどち

歌おもひ

などせむには、庭の植木の末葉より、下葉にしたゞる雫、軒よりおつる玉水の音きゝたらむばかり、心も澄みてをかしきはなし。

(二)命名の次第
吉備の道の口

(二)　これに深く心とむる人あり。渡邊重豐とて、吉備の道の口の岡山の里人になむ。この人、家のあたりに雨夜菴を造れり。しか名づけたるよしは、草の菴なれど、杉板もて葺ける處ありて、雨の音高く聞ゆるやうに、心して造りたるゆゑとぞ。

心して造り
心寄せのあるじ
一本

かく雨に心寄せのあるじなれば、降るを厭ふ花の木は一本もなく、庭には柳の限を植ゑなめたり。

(三)時々の趣
黄昏
そゞろ寒き

(三)　春雨のあした、緑の絲に露の白玉ぬきとめたらむは、いふべくもあらず。夕立してなごり涼しき黄昏に、木のもとの雫にたちぬれては、そゞろ寒きばかりにこそ。又いつしかとけしきだつ初時雨にさそはれて梔子色なる葉の、ほろほろと散りたらむは物あはれなるべし。かゝれば、この菴の雨は、靜なる音聞くのみかは、をり〳〵にをかしきふしぞ多かるや。(後集、巻の上)

けしきだつ初時雨
梔子色
をかしきふし

一三　屋島に行きたる記

(一)往路の様
あからさまに
めかゞやくばかり

(一)　もの敎へに行きて、あからさまに讃岐の國の高松のさとにありける頃、ながの月の六日といふに、屋島の古きあとを見むとて出でたつに、これかれ從ふ。乘りて渡る船のうちも、めかゞやくばかりしつらひたり。程もなく屋島に至りぬ。

(二)昔の事の思出
言ひ知らずをかし
割籠

(二)　山に登れば、けしき言ひ知らずをかし。むしろなど重ねしきて、割籠とり出でなどするほどに、短き秋の日は傾き

ぬ。たちて東の方に山路を下りてありく。大宮のありし處はそこ、源平の家の人々の戰ひしはこゝと、昔よりいひつぎ來ぬる事ども、高松人の語るを聞くに、そのかみの事思ひ出でられて、そゞろにかなし。

(三)　松風の聲も、ものすごく聞えければ、

いくさ人　吹きし小笛の　ふる聲を
のこすやしまの　山の松風。

暮れ果てて、峰に月細く見ゆ。

弓張の　月をやしまの　峯に見て
鞆の音せし　昔をぞおもふ　（後集、卷の中）

(三)詠歌
小笛のふる聲
弓張の月
鞆の音

北畠親房は、剃髮して宗玄と號し、後醍醐・後村上の頃の五朝に仕へし忠臣なりき。

神の國
瑞穗の國
大八洲國
大日本
日本
大和

第三類　歴史類

第五篇　神皇正統記　北畠親房

第一　發端

一　我が國號

大日本は神の國なり。天祖國常立尊始めて基を開き、日神天照大神長く統を傳へ給ふ。我が國のみこの事あり、異朝にはそのたぐひなし。このゆゑに神の國といふなり。神代には豊葦原の千五百秋の瑞穗の國といひ、又大八洲國とも又は耶麻土ともいひ、耶麻土は後に大日本とも日本とも大和とも書けり。この外にもあまたの名あり。秋津洲とも細戈千足國とも磯輪上秀眞國ともいへり。（卷の一）

天津日嗣　日神天照大神の御世嗣をいふが本にて、天皇の御位を指して申し奉るなり。

繼體一種

正しきに歸る道

正理の皇統

二　天津日嗣

我が朝の始は、天神の種を受けて國土を建立し、天祖よりこの方繼體たがはず、唯一種まし〳〵て、天地の開けし初より今の世に至るまで、天津日嗣を受け給ふことよこしまならず。一種姓の中におきても、自ら傍より傳へ給ひしすら、猶正しきに歸る道ありてぞ保ちまし〳〵ける。これ神明の御誓あらたにして、餘國にその類なきいはれなり。（卷の一）

三　書名の次第

抑、神道の事は、たやすく顯さずといふことあれど、根元を知らざれば、亂りがはしき端とも成りぬべし。そのつひえを救はむために、聊か神代より天津日嗣の正理にて、受け傳へつるいはれを述べむ事を志して、當に聞ゆる事は載せず。

この書の名

（一）天孫降臨

中津國の主

（二）三種の神寶

勅して宣はく云々

日本書紀に、「葦原千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可レ王之地也。爾皇孫、宜ニ就而治一焉。行矣。寶祚之隆、當下與ニ天壤一無上レ窮者矣。」とあり。

ほぎて云々

古語拾遺に、「吾

然ればこの書をば、神皇正統記とや名づくべき。（卷の一）

第二　神代の巻

四　彦火瓊々杵尊

（一）第三代、天津彦彦火瓊々杵尊、天孫とも皇孫とも申せり。皇祖天照大神、高皇産靈尊、この尊をいつきめぐみまし〳〵、相謀り葦原の中津國の主となして、天降し給ひぬ。八百萬の神、勅を受けて、御供に仕へまつれり。

（二）又皇祖、三種の神寶を授けまし〳〵ぬ。まづ豫め皇孫に勅して宣はく、「葦原の千五百秋の瑞穗の國は、これ吾が子孫の王たるべき地なり。爾皇孫宜しく就いて治らせ。行く。寶祚の隆えまさむこと、當に天壤と窮なかるべし。」と。

又皇祖、御手に寶の鏡を持ち給ひ、皇孫に授けほぎて、「吾が兒

兒、視ニ此寶鏡一當三猶レ視レ吾、與同レ牀共レ殿、以爲ニ齋鏡一。と見え、舊事本紀にも見えたり。

曲妙云々　すぐれて靈なる心にて、世を治め給へとの意なり。

皇統一種の起原

此の寶の鏡を視まさむこと、當に猶吾を視るが如く、與に牀を同じくし、殿を共にして、齋の鏡とすべし」と宣ひき。八阪瓊の曲玉、天の叢雲の劍を加へて三種とす。又この鏡の如くに分明なるを以て、天下に照臨し給へ。八阪瓊の廣れるが如く、曲妙を以て天下をしろしめせ。神劍をひきさげて、まつろはぬものを平げ給へ。」と、勅まし〳〵けりとぞ。この國の神靈として、皇統一種正しくましますこと、誠にこれらの勅に見えたり。

(三)神器の意義

(三)　抑、彼の寶鏡は、神勅を受けて、石凝姥命の作り給へりし八咫の御鏡、玉は八阪瓊の曲玉、玉屋命の作り給ひしなり。劍は素戔嗚尊の得給ひて、大神に奉られし叢雲の劍なり。この三種につきたる神勅は、正しく國を保ちますべき道なるべし　鏡は一物をたくはへず、私の心なくして萬象を照すに、是非善惡の姿顯れずといふことなし。その姿に從ひて、感應するを德とす、これ正直の本源なり。玉は柔和善順を德とす、慈悲の本源なり。劍は剛利決斷を德とす、智慧の本源なり。この三德を合せ受けずしては、天下の治らむこと誠に難かるべし。神勅明かにして、詞つゞまやかに旨廣し。剩へ神器に顯し給ひぬ。いとかたじけなきことにや中にも鏡を本とし、そは宗廟の正體と仰がれ給へり。鏡は明を姿とせり。心性明かなれば、慈悲決斷はおのづからその中にあり。又正しく御影をうつし給ひしかば、深き御心を留め給ひけむかし。(卷の一)

正直の本源

慈悲の本源

智慧の本源

宗廟の正體

第三　人皇の卷

○應神天皇の條、

(一)天地の正氣

神道

大倭姫命の教

倭姫世記に見えたり。

(二)心の萠芽霜を履みて云云

易經坤卦に見えたり。

積善の家云々

易經文言傳に見えたり。

五　眞の正道

(一)　凡そ天地の間にありとしある人、皆その正氣を受けたり。不正にしては立つべからず。殊更我が國は神の國なれば、神道に違ひては、一日も日月を戴くまじきことなり。大倭姫命人に教へ給ひけるは、「黑き心なく、丹き心を持ちて、清く潔く齋み愼め。左を左とし、右を右とし、萬事違ふ事なくして、大神に事うまつれ。始を始とし、本を本とするゆゑなり。」となむ。誠に神に事へ、君に事へ、國を治め、人を教へむ事もかゝるべしとぞ覺ゆる。

(二)　少しの事も心に許さば、大いに誤る本となる。周易に、「霜を履みて堅冰至る。」といへり。孔子これを釋して曰はく、「積善の家には餘慶あり、積不善の家には餘殃あり。君を弑し父を弑すも、一朝一夕のゆゑにあらず。」といへり。毫釐も君をゆるがせにする心を萌すものは必ず亂臣となる。芥蔕も親をおろそかにする形あるものは、果して賊子となる。

芥蔕

道は須臾も云云

中庸にあり。

このゆゑに古の聖人も、「道は須臾も離るべからず。離るべきは道にあらず。」と說けり。

(三)眞の正道

(三)　されどその末を學びて源を明めざれば、事に臨みて覺えざる誤あり。その源といふは、心に一物を蓄へざるをいふ。しかも虛無の中に留るべからず。天地あり、君臣ありて、善惡の報は影響の如し。おのれが慾を棄て、人を利するを先として、境々に對すること、鏡の物を照すが如く明々として迷はざらむを眞の正道といふべき。世下れりとて、自ら卑むべからず。しかのみならず、君も臣も神を去ること

善惡の報

眞の正道

神の本誓

○嵯峨天皇の條

遠からず。常に神明の知見を顧み、神の本誓を覺りて、正居らむことを志し、苟も邪なからむことを思ふべし。（卷の二）

六 諸の道々

（一）諸道の要

儒●道の二教

儒は孔孟の教、道は老子を祖とせし道教を指せり。

（二）分業の要

（大正八年、山口高商、大正八年、水産、入ふ試驗問題）

人倫の大本

四民

（三）文武の二道

（一）一宗に志ある人、餘宗を謗りいやしむこと大きなる誤なり。且は佛教に限らず、儒・道の二教、乃至諸の道、賤しき藝までも、興し用ふるを聖代といふべきなり。

（二）凡そ男夫は、稼穡を勤めて己も食し、人にも與へて飢ゑざらしめ、女子は紡績を事として自らも著、人をも暖ならしむ。賤しきに似たれども、人倫の大本なり。天の時に隨ひ、地の利に依れり。この外商估の利を通ずるもあり。工巧の技を好むもあり。仕官に志すもあり。これを四民といふ

（三）仕官するにとりて、文武の二道あり。坐して以て道を論ずるは文士の道なり。この道に明かならば、相とするに堪へたり。征きて以て功を立つるは武人の業なり。この業に譽あらば、將とするに足れり。されば文武の二つは、須臾も捨て給ふべからず。「世亂れたる時は武を右にし文を左にす。國治れる時は、文を右にし武を左にす」ともいへり。かくの如く、さまざまなる道を用ひて、民の愁をやすめ、各爭なからしめむ事を本とすべし。民の賦斂を厚くして、自らの心をほしきまゝにすることは、亂世・亂國の基なり。（卷の二）

武を右にし云云

右は上なり、武を尚ぶ義なり。李咸用の遠公亭牡丹の詩に「左文右武憐君夢」の句あり

文を右にし云云

潘炎の君臣相遇樂賦に「或右文而左武」の句あり。

○仲恭天皇の條

（一）賴朝の勳功

七 賴朝の勳功

（一）さても承久の世の亂れを思ふに、誠に末の世には迷ふ心もありぬべく、又下の上を凌ぐ端ともなりぬべし。その いはれをよく辨へらるべき事なり。賴朝、勳功は昔よりた

ぐひなき程なれど、偏に天下を掌にせしかば君として安からず思しめしも理なり。

(二)政道の衰退（明治四十年、海軍機關、同四十四年、新潟醫專、大正三年、一產、入學試驗問題）

(二)　然れども、白河・鳥羽の御代の頃より、政道の古き姿やうやう衰へ、後白河の御時兵革起りて、姦臣世を亂り、天下の民ほと〳〵塗炭の苦に陷りしが、頼朝一臂を揮ひて、その亂を平げたりき。皇室は古きに復るまではなかりしかど、九重の塵もをさまり、萬民の肩もやすまりて、上下堵に安んじ、東より西より、その德に服せしかば、實朝なくなりても、叛く者ありとは聞えざりき。これに勝る程の德政なくして、いかでかたやすく覆さるべき。たとひ亦失はれぬべくとも、民安かるまじくば、上天より與し給はじ。（卷の五）

上下堵に安んじ

（後嵯峨天皇の條）

八　泰時の德政

(一)泰時の德政（大正元年、海軍經理、同七年、神戸鳥商、入學試驗問題）

本所の煩

(一)　大方泰時、心正しく政すなほにして、人をはぐくみ、物に奢らず、公家の御事を重くし、本所の煩を止めしかば、風の前に塵なくして、天の下鎭りき。かくて年代を重ねしこと、偏に泰時が力とぞ申し傳ふめる。

(二)君臣の道

(二)　凡そ保元・平治よりこの方の亂りがはしきに、頼朝といふ人もなく、泰時といふ者もなからましかば、日本國の人民いかゞなりなまし。このいはれをよく知らぬ人は、故もなく皇威の衰へ、武備の勝ちにけると思へるは誤なり。

(三)人臣の道

長田・狹田の稻

(三)　固より人臣としては、君を尊び民を憐み、天に跼り地に蹐し、日月の照すを仰ぎても、心のきたなくして、光に當らざらむことをおぢ、雨露の施すを見ても、身の正しからずして、惠に洩れむことを顧みるべし。朝夕に、長田・狹田の稻の種

生井・榮井の水
皇恩
神德
正路

○後醍醐天皇の條

(一)人臣の用意
(明治四十二年、海軍機關、大正四年、陸軍士官、同四年、小樽高商、同六年、專門、同九年、神宮、入學試驗問題)

をくふも皇恩なり。晝夜、生井・榮井の水の　を飲むも神德なり。これを思ひも入れず、有るに任せて慾を恣にし、私を先として公を忘るゝ心あらば、世に久しき理あらじ。況んや國柄を執る仁に當り、公權を預る人として、正路を蹈まざらむにおきては、いかでかその運を全くすべき。泰時の昔を思ふには、よく誠ある所ありけむかし。(卷の五)

九　人臣の道

(一)　凡そ王土に生れて、忠を致し、命を捐つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。しかれども、後の人を勵し、その後を憐びて、賞せらるゝは君の御政なり。下として爭ひ申すべきにはあらぬにや。ましてさせる功なくして、過分の望　致すこと、自らあやぶむる端なれ

前車の轍
漢書に、「前車覆、後車戒。」と見えたり。

豪强を誡む

(二)心詞の愼
言語は云々
易の繫辭傳に、「言行者君子之樞機、樞機之發、榮辱之主也。」とあり。

堅き冰は云々
易經に、「履レ霜堅冰至。」とあり。
(明治三十五年、千葉醫專、同四十一年、山口高商、同四十二年海軍、機關、大正四年、專門、入學試驗問題)

(三)行末の人の心
許由・巢父
共に支那古代の隱者なり。

ど、前車の轍を見ることは、誠にあり難き習なりけむかし。中古までも人の徒に豪强なるをば誡められき。豪强になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を滅し、家を失ふためしあれば、誡められしもことわりなり。

(二)　言語は君子の樞機なり」といへり。あからさまにも、君を蔑にし、人に驕ることは、あるべからぬ事にこそ。古人も言ひつる如く、堅き冰は霜を履むより至る習なれば、亂臣・賊子といふものは、初め心詞を愼まざるより出でくるなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光の變るにもあらず、草木の色の改るにもあらず、人の心の惡しくなりゆくを、末世とはいへるにや。

(三)　昔許由といへる人は、帝堯の國を傳へむとありしを聞

潁川　支那河南省にあり。

○後醍醐天皇の條

八月　延元四年（紀元一九九九年）なり。（明治三十五年、高等學校、入學試驗問題）

（大正十三年、明治專門、入學試驗問題）

獲麟に云々　孔子春秋を作りて、魯哀公十四年、西狩獲レ麟。」とある記事にて、筆を止めたり。仲尼は孔子の字なり。

きて、潁川に耳を洗ひき。巢父はこれを聞きて、この水をだに、きたながりて渡らざりき。その人の五臓六腑の異なるにはあらじ。能く思ひならはせるゆゑにこそあらめ。なほ行末の人の心、思ひやるこそあさましけれ。（卷の六）

一〇　後醍醐天皇の崩御

さても八月の十日あまり六日にや、御門、秋霧に冒されさせたまひて、隱れまし〳〵ぬとぞ聞えし。寢るが中なる夢の世、今に始めぬ習とは知りながら、かず〳〵目の前なる心地して、老の涙もかきあへねば、筆の跡さへ滯りぬ。昔、仲尼は獲麟に筆を絶つとあれば、茲にて止りたくはあれど、神皇正統のよこしまなるまじきことわりを申し述べて、素意の末をも顯さまほしくて、强ひて記しつくるなり。（卷の六）

（一）老尼の參詣　鶴の林　沙羅雙樹の林、釋迦如來入滅の地なり。

薪盡きにし　入滅せしことにて、法華經序品に、「佛此夜滅度。如薪盡火滅」と見えたり。

二傳　唐土に傳り、更に我が國に傳れる義なり。

清涼寺　山城國葛野郡上嵯峨にあり。

常在靈鷲山　法華經壽量品の偈の句なり。

（二）聽者と老尼との問答　（明治四十三年、外國語、大正十年、京都蠶業、入學試驗問題）

第六篇　增鏡

一　序

著者未詳（一說、吉野朝時代の人）

（一）、如月の中の五日は、鶴の林に薪盡きにし日なれば、かの如來二傳の御かたみのむつまじさに、嵯峨の清涼寺にまうでて、常在靈鷲山など、心のうちに唱へて拜み奉る。傍にやそぢにもや餘りぬらむと見ゆる尼一人、鳩の杖にかゝりて參れり。とばかりありて、「たけく思ひ立ちつれど、いと腰いたくて堪へがたし。今宵はこの局にうち休みなむ。坊へ行きて、みあかしの事など言へ。」とて、具したる若き女房の、つきづきしき程なるをばかへしぬめり。

（二）年の程など、聞くも珍しき心地して、かゝる人こそ昔物語もすなれと思ひ出でられて、まめやかに語らひつゝ、「昔の

すげみたる口
ぬば玉の夢
おぼほれ
けしうはあら
ずあへなむ
ます鏡
わなゝかし

事の聞かまほしきまゝに、年の積りたらむ人もがなと思ひ給ふるに、うれしきわざかな。少しのたまはせよ。おのづから、古き歌など書きたる物のかたはし見るだに、その世に遭へる心地するぞかし。」といへば、すげみたる口うちほゝゑみて、「いかでか聞えむ。若かりし世に見聞き侍りし事は、こらの年頃に、ぬば玉の夢ばかりだになくおぼほれて、何のわきまへか侍らむ。」とはいひながら、けしうはあらず、あへなむと思へる氣色なれば、いよ〳〵いひはやしけるに、かの大鏡・水鏡などには、なぞらへ給ふまじうなむとて、

おろかなる　心や見えむ　ます鏡
古きすがたに　たちはおよばで。

と、わなゝかし出でたるもにくからず、いと古代なり。「さらば、今のたまはむ事をも書き記さむ」といらへて、

今もまた　むかしをかけば　ます鏡
ふりぬる代々の　跡にかさねむ。（序）

○おどろの下
（一）治れる御代
しろしめし
御うつくしび
の波
ざえある人
（明治四十四年、山口高商、入學試驗問題）
（二）敷島の道

二　後鳥羽天皇の治績

（一）建久三年三月十三日に、法皇かくれさせ給ひし後は、帝ひとへに世をしろしめして、四方の海波靜かに、吹く風も枝を鳴さず、世治り民安くして、あまねき御うつくしびの波、秋津島の外まで流れ、しげき御惠、筑波山の蔭よりも深し。よろづの道々に、あきらけくおはしませば、國にざえある人多く、昔に恥ぢぬ御代にぞありける。

（二）中にも敷島の道なむすぐれさせ給ひける。御歌、數知らず人の口にある中にも、

おどろの下
道ある世
やんごとなく
(一)樂しき雅遊
えもいはず
御心ゆく限り

奥山の　おどろの下も　蹈み分けて
　　道ある世ぞと　人に知らせむ

と侍るこそ、政大事と思されける程、しるく聞えて、いといみじくやんごとなくは侍れ。(第一)

三　水無瀬殿の遊興

(一)　鳥羽殿・白河殿なども修理せさせ給ひて、常に渡り住ませ給へど、尚又水無瀬といふ所に、えもいはず、おもしろき院づくりして、しば〳〵通ひおはしましつゝ、春秋の花・紅葉につけても、御心ゆく限、世をひゞかして、遊をのみぞし給ふ。所がらもはる〴〵と川に臨める眺望いと面白くなむ。元久の頃、詩に歌を合せられしにも、とりわきてこそは、

見わたせば　山もとかすむ　水無瀬川

(二)殿舎の趣
廊　渡殿
石のたゝずまひ
霞の洞
○新島守
(一)院の思召
心づかひ
かつ〴〵
御かうじ

ゆふべは秋と　なに思ひけむ。

(二)　萱葺の廊・渡殿など、はる〴〵と艶にをかしうせさせ給へり。御前の山より瀧おとされたる石のたゝずまひ、苔深き深山木に枝さしかはしたる庭の小松も、げに〳〵千世をこめたる霞の洞なり。(第一)

四　後鳥羽院の企圖

(一)　さても院の思し構ふる事、忍ぶとすれど、やう〳〵洩れ聞えて、東ざまにも、その心づかひすべかめり。あづまの代官にて、伊賀の判官光季といふものあり。かつ〴〵かれを御かうじのよし仰せらるれば、御方に參るつはものども押寄せたるに、遁るべきやうなくて腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ院は思召しける。

(二)北條氏の計畫
さるべくて
我が身の宿世
承久三年（仲恭天皇（紀元一八八一年）の朝なり。）
(一)東軍の出立
富士川（駿河國にあり。）
天龍川（遠江國にあり。）
えもいはず漲りさわぎ

(二) あづまにもいみじうあわて騒ぐ。「さるべくて身の失すべき時にこそあなれ。」と思ふものから、「討手の攻め來りなむ時には、かなきさまにて屍を曝さじ。おほやけと聞ゆとも、自らし給ふ事ならねば、且は我が身の宿世をも見るばかり。」と思ひなりて、弟の時房と、泰時といふ一男と、二人をかしらとして、雲霞のつはものをたなびかせて都にのぼす。（第二）

五　東軍の西上

(一) 承久の三年は、いつの年よりも五月雨霽間なくて、富士川・天龍川など、えもいはず漲りさわぎて、いかなる龍馬もうち渡し難ければ、攻め上る武者どもも、怪しくなやめり。かれども遂に都に近づくよし聞ゆれば、君の御武者も出で立つ。その勢六萬餘騎とかや。宇治・勢多に分ち遣す。世

世の中ひゞきのしる様
遠き世界
(二)院方の敗軍
六月十日あまり（承久三年六月十五日の事なり。）
荒磯
高潮
(一)院の後悔
はからひおきてつゝ

の中ひゞきのゝしる様、言の葉も及ばず、まねび難し。あるは深き山に逃げこもり、遠き世界に落ちくだり、すべて安げなく騒ぎみちたり。「いかゞあらむ。」と、君も御心亂れて思しぼ、いと心あわたゞしく色を失ひたる様ども、頼しげなし。

(二) 六月十日あまりにや、いくばくの戰だになくて、遂に身方の軍敗れぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはむ方なくあきれて、上下たゞ物にぞあたり惑ふ。（第二）

六　後鳥羽院の遷幸

(一) あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍はからひおきてつゝ、保元の例にや、院の上、都の外に遷し奉る

木院　後鳥羽法皇のことなり。

ものにもがなや　源氏物語の帚木の巻の引歌。「とりかへすものにもがなや世の中を、あり〳〵てながらのわが身と思へば。」に基けり

（二）遙なる波路

（三）事の起因（明治二十六年、高等學校、入學試驗問題）

一ふし二ふしのよせきざみ

べしと聞ゆれば、女院・宮々、處々におぼし惑ふ事さらなり。本院は隱岐の國におはしますべければ、「ものにもがなや」と思さるゝもかひなし。

（二）かくて七月の十三日、御船にたてまつりて、遙なる波路を凌ぎおはします御心地、この世の同じ御身ともおぼされず。いみじう、いかなりける世々の報にかとうらめし。新院も佐渡の國に遷らせ給ふ。

（三）さてもこの度世の有樣、げにうたて口惜し。唐土にも日の本にも、國を爭ひて戰をなしし事數へ盡すべからず。それも皆一ふし二ふしのよせはありけむ。もしは筋異なる大臣、さらでもおほやけともなるべききざみの、少しの違目に世に隔りて、その恨の末などより事起るなりけり（第二）

吹く風の云々　御聖德の盛なる有樣の譬へていへるなり。

津の國の云々　後拾遺集、和泉式部の歌。「津の國のこやとも人のいふべきに、ひまこそなけれ蘆の八重葺。」に據れる句なり。「こやの」は攝津國川邊郡、昆陽野の地名に言ひ掛けたり。

（一）磯の苫屋

藐姑射の山　莊子、逍遙遊の篇に、「藐姑射山有二神人一居焉。」の語に據れり。

七　後鳥羽院の聖德

六つにて位に卽き給ひて、十三年おはしましき。おり給ひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下は同じ事なりしかば、すべて三十六年が程、この國のあるじとして、萬機の政を御心ひとつにをさめ、百の官をしたがへ給へりしその程、吹く風の草木を靡すよりもまされる御有樣にて、遠きをあはれび、近きをなで給ふ御惠、雨の脚よりもしげければ、津の國のこやの、ひまなき政を聞し召すにも、難波の葦の亂れざらむことをおぼしき。（第二）

八　後鳥羽院の回想

（一）藐姑射の山の峯の松も、やうゝ枝を連ねて、千代に八千代をかさね、霞の洞の御すまひ、幾春を經ても、空行く月日

あり〳〵て　の限知らず、のどけくおはしましぬべかりける世をありあり
て、よしなき一ふしに、今はかく花の都をさへ立ち別れ、お
のがちり〴〵にさすらへ、磯の苫屋に軒を竝べて、自らこと
とふものとては、浦に釣する海人小舟、鹽焼く煙のなびく方
をも、我が古里のしるべかとばかり、ながめ過させ給ふ。

さすらへ

ことゝふ

(二)　御住ひどもは、それまでと月日を限りたらむだに、明日
しらぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべし　まいてい
つをはてとか、めぐり逢ふべきかぎりだになく、雲の波、煙の
波の幾重ともしらぬ境に、世をつくし給ふべき御さまども、
口をしと、いふもおろかなり。（第二）

(二)心細き境遇（大正七年、北海大農、入學試驗問題）

うしろめたさ

雲の波煙の波

九　後鳥羽院の行宮

(一)　このおはします所は、人はなれ里遠き島の中なり。海

(一)行宮の有様

づらよりは少しひき入りて、山陰に片そへて、大きやかなる
巖の峙てるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしき
ばかり事そぎたり。誠に「柴の庵のたゞしばし。」と、かりそめ
に見えたる御宿りなれど、さる方になまめかしく、故づきて
しなさせ給へり。水無瀬殿思し出づるも夢のやうになむ。

事そぎ

柴の庵　新古今集、雜、西行法師の歌、「いづくにも住まれずばただ住まであらむ、柴の庵のしばしなる世に。」に據れり。

(二)　はる〳〵と見やらるゝ海の眺望、二千里の外ものこり
なき心地する、今更めきたり。汐風のいとこちたく吹きく
るを聞し召して、

(二)悲哀の詠歌

二千里の外　白氏文集卷十四、白樂天の詩句、「三五夜中新月色。二千里外故人心。」に據れる句なり

こちたく

吾こそは　新島守よ　おきの海の
あらき浪風　こゝろして吹け。

同じ世に　又住の江の　月や見む
今日こそよそに　おきの島守。（第二）

○むら時雨

(一)叡山登り　引きたがへ

さうなく　たばかり

師賢　藤原氏。家を花山院と稱し、文貞公と諡せられたり。

兩法親王　尊雲・尊澄の兩法親王のことなり。

(二)裝束の有樣　うのはなをどし

卯花縅

妙法院の宮　尊澄法親王のことなり。

一〇　師賢卿の叡山登り

(一)　阪本には、行幸を待ち聞え給ひけるに、引きたがへ南ざまへおはしましぬれば、そのよし衆徒に聞かれなば、あしかりぬべし。又とまれかくまれ、まことのおはしまし處を、さうなく武家に知らせじのたばかりにやありけむ、花山院の大納言師賢を山につかはして、忍びて御門のおはしますよしにもてないて、かの兩法親王事行ひ給ひつゝ、六波羅の兵どもの圍を防がせ給ふ。

(二)　その日は、大納言も大塔の前の座主の宮もうるはしき武士姿にいでたゝせ給ふ　卯花縅の鎧に、鍬形の兜たてまつり大矢負ひてぞおはする。妙法院の宮は、すゞしの御衣の下に、萌黄の腹卷とかや著給へり。大納言は、からの香染

香染の薄物　けちえん　掲焉の字音（呉音）の語なり。

(一)山徒の變心

六波羅　京都六波羅密寺の邊にあり き。當時、北條氏京都を鎮護せし役所なり。

(二)笠置參向

志賀の浦　今の近江國滋賀郡、琵琶湖の浦のことなり。

有明の月　（大正十年、專門、綸定試驗問題）

の薄物の狩衣に、けちえんに赤き腹卷をすかして、さすがに卷繪の細太刀をぞ佩き給ひける。（第十八）

一一　師賢卿の笠置參勤

(一)　六波羅より、御門茲におはしますと心得て、武士ども多く參り圍む。かゝれども御門笠置におはします由、程なく聞えぬれば、「謀られ奉りにけり。」とて、山の衆徒も少々心變りしぬ。宮々も逃げ出で給ひて、笠置へぞまうで給ひける。

(二)　大納言は都へまぎれおはすとて、夜深く志賀の浦を過き給ふに、有明の月くまなく澄み渡りて、寄せ返る波の音もさびしきに、松吹く風の身にしみたるさへ、とり集め心細し。

思ふこと　なくてぞ見まし　ほの〴〵と

ありあけの月の　志賀の浦波。

早馬

笠置殿　當時、後醍醐天皇の行在所なりき。

すくよか

いかめしくしたゝめ　（大正三年、東京高師、同六年、海軍兵學、入學試驗問題）

（大正三年、海軍經理、同六年、東京蠶絲、入學試驗問題）

その後、辛うじてぞ笠置へは辿り參られける。かやうの事どもも、例の早馬にてあづまへ告げやりぬ。（第十八）

一二　楠木正成の忠勤

笠置殿には、大和・河内・伊賀・伊勢などより、兵ども參りつどふ中に、事の始より頼み思されたりし楠木兵衛正成といふものあり。心猛くすくよかなるものにて、河内の國におのが館のあたりを、いかめしくしたゝめて、このおはします處、もし危からむをりは、行幸をもなしきこえむなど用意しけり。東の夷どもも、やう〳〵攻め上るよし聞ゆ。（第十八）

一三　笠置の敗軍

あづまの武士ども、雲霞の勢をたなびかし上るよし聞ゆれば、笠置にもいみじう思しさわぐ。もとよりいと險しき山のつゞらをりを、えもいはず、木戸・逆茂木・石弓などいふ事どもしたゝめらる。さりとも、たやすくは破れじと頼ませ給へるに、後の山より御かたきども崩れまゐりて、木戸ども焼き拂ひ、おはしますあたり近く、已に煙もかゝりければ、今はいかゞせむにて、あやしき御姿にやつれて、辿り出でさせ給ふ。座主の法親王御手をひき奉り給へるも、いとはかなげなる御ありさまなり。（第十八）

つゞらをり

木戸

逆茂木

石弓

崩れまゐり

座主の法親王　尊澄法親王のことなり。

○久米のさら山　（大正元年、高等學校、入學試驗問題）

大峰　大和國十津川東方の大山脈をいふ。

吉野　大和國吉野郡吉野山を指せり。

高野　紀伊國伊都郡高野山を指せり。

一四　大塔宮の武勇

宮は熊野におはしましけるが、大峯を傳ひて、しのび〳〵吉野にも高野にも、おはしまし通ひつゝ、さりぬべきくま〳〵には、よく紛れものし給ひて、武き御ありさまをのみ顯し給へば、いとかしこき大將軍にていますべしとて、附き隨ひき

こゆるもの、いと多くなりゆきけり。（第十九）

○月草の花（大正七年、海軍兵學、入學試驗問題）

一五　後醍醐天皇の歸途

正慶二年閏二月の頃、都にもなほ世の中しづまりかねたるさまに聞ゆれば、よろづに思しなぐさめて、關守のうち寢るひまをのみうかゞひ給ふに、しかるべき時の到れるにや、御垣守に候ふ兵どもも、御氣色をほの心得て、靡き仕うまつらむと思ふ心つきにければ、さるべき限かたらひ合せて、おなじ月の二十四日の曙に、いみじくたばかりて、かくろへゐて奉る。いとあやしげなる、海人の釣舟のさまに見せて、夜深き空の暗きまぎれに押出せり。折しも霧いみじう降りて、行先も見えず。いかさまならむと危けれど、御心を鎭めて念じ給へり。（第二十）

正慶二年（後醍醐天皇の朝（紀元一九九二年）なり。（大正十三年、横濱高商、入學試驗問題）

御垣守ほの心得て

たばかりてかくろへゐて奉る

いかさまならむ

第四類　軍記類

第七篇　太平記

小島法師

一　後醍醐天皇の治績

小島法師は、吉野朝時代の人なるべしといふ。

（一）武臣の專

狼煙天を翳め鯨波地を動す

（二）聖德至大

三綱・五常

（一）本朝人皇の始、神武天皇より九十六代の帝、後醍醐天皇の御宇に當つて、武臣相模守平高時と云ふ者ありき。此の時、上、君の德に乖き、下、臣の禮を失へり。是より四海大きに亂れて、一日も未だ安からず、狼煙天を翳め、鯨波地を動すこと、今に至るまで四十餘年、諸人春秋に富むことを得ず、萬民手足を措く所なかりき。

（二）此の時の帝、後醍醐天皇は、得年三十一の時、御位に卽き給へり。御在位の間、內には三綱・五常の儀を正しうして、周

萬機・百司の政
延喜・天暦の跡

公・孔子の道に順ひ、外には萬機・百司の政怠り給はず、延喜・天暦の跡を追はれしかば、四海風を望みて悦び、萬民德に歸して樂めり。

(三)諸道の復興
寺社・禪律の繁昌
顯密・儒道の碩才

(三)　凡そ諸道の廢れたるを興し、一事の善をも賞せられしかば、寺社・禪律の繁昌茲に時を得、顯密・儒道の碩才も皆望を達せり。誠に天に受けたる聖主、地に奉ぜる明君なりと、その德を稱し、その化に誇らぬ者はなかりけり。(卷の一)

白狀

二　俊基朝臣再び關東下向

(一)　事の起因

俊基朝臣は、先年土岐十郎賴兼が討たれし後、召し捕られて、鎌倉まで下り給ひしかど、樣々に陳じ申されし趣、實にもとて赦免せられたりけるが、又今度の白狀どもに、專ら隱謀の

七月十一日
元弘元年なり。

何と陳ずとも許されじ

企、彼の朝臣にありと載せられたりければ、七月十一日に、又六波羅に召し捕られて、關東に送られ給へり。再犯赦さざるは法令の定むる所なれば、何と陳ずとも許されじ、路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの閒をば離れじと、思ひまうけてぞ出でられける。

櫻花の雪
片野の春の櫻狩

(二)　思はぬ旅

落花の雪に蹈み迷ふ、片野の春の櫻狩、紅葉の錦を著て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明す程だにも、旅寢となればものうきに、恩愛の契淺からぬ、吾が故鄕の妻子をば、行方も知らず思ひ置き、年久しくも住み馴れし、九重の帝都をば、今を限と顧みて、思はぬ旅に出で給ふ、心の中ぞあはれなる。

九重の帝都

(三)　近江路の旅

うきをば留めぬ逢阪の關

行きかふ人にあふみ路や

見えわかず

猶もるものは秋の雨

うきをば留めぬ逢阪の、關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱、沖を遙に見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く、身をうき船の浮き沈み、駒もとゞろと蹈み鳴す、勢多の長橋うち渡り、行きかふ人にあふみ路や、世を宇禰の野に鳴く鶴も、子を思ふかと哀なり。　時雨もいたく森山の、木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎ行けば鏡の山はありとても、涙に曇りて見えわかず。　物を思へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒を留めて顧みる、古郷を雲や隔つらむ。

（四）　番場より池田まで

番場・醒井・柏原、不破の關屋は荒れ果てて、猶もるものは秋の雨、いつか吾が身のをはりなる、熱田の八劔伏し拜み、汐干にいまや鳴海潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、

晩鐘鳴れば

白雲路を埋み來て

西行法師命なりけり

新古今集、羈旅、西行法師の歌、「年たけて又越ゆべしと思ひきや、命なりけり小夜の中山。」を指せり。

末はいづくととほたふみ、濱名の橋の夕汐に、引く人もなき捨小船、沈みはてぬる身にしあれば、誰か哀とゆふぐれの、晩鐘鳴れば今はとて、池田の宿に著き給ふ。

（五）　小夜の中山より菊川まで

旅館の燈幽かにして、鷄鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて、天龍川をうち渡り、小夜の中山越え行けば、白雲路を埋み來て、そこともの知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が、「命なりけり。」と詠じつゝ、二度越えし跡までも、うらやましくぞ思はれける。

隙行く駒の足はやみ、日已に亭午に昇れば、餉進らする程とて、輿を庭前に舁き止む。　轅を叩きて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すなりと答へければ、承久の

合戰の時、院宣書きたりし咎によりて、宗行卿關東へ召し下されしが、此の宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水　汲下流而延齡。
今東海道菊川　宿西岸而終命。

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、あはれやいとゞまさりけむ、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

遠き昔の筆の跡

いにしへも　かゝるためしを　きく川の
おなじ流に　身をやしづめむ。

龍頭首船

（六）大井川より宇都の山まで

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の、嵐の山の花盛、龍頭首の船に乘り、詩歌管絃の宴に侍りし事も、今は再び見ぬ夜の夢となりぬと、思ひ續け給ふ。島田・藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛うら枯れて物悲しき夕暮に、宇都の山邊を越え行けば、蔦楓いと茂りて道もなし。昔業平の中將の住處を求むとて、東の方に下るとて、「夢にも人にあはぬなりけり。」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。

岡邊の眞葛

夢にも云々　伊勢物語、在原業平の歌、「駿河なる宇都の山邊のうつゝにも、夢にも人にあはぬなりけり。」を指せり。

（七）清見潟より鎌倉まで

清見潟を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとゞ涙を催され、向はいづこ三穗が崎、興津・蒲原うち過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思に比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎ行けば、汐干や淺き船浮きて、下り立つ田子のみづからも、浮世を遶る車返、竹の下道行き惱む、足柄山の峠より、大磯・小磯見下して、袖に

通さぬ波の關守

上なき思云々　新古今集、藤原家隆の歌、「富士のねの煙もなほそ立ちのぼる、上なきものはおもひなりけり。」に據れる句なり。

こゆるぎ　小餘綾と書き、今の相模國中郡國府村の邊を指せり。

由良の港　紀伊國にあり。

浦の濱木綿

月に瑩ける玉津島　玉津島は和歌浦にあり。今は妹背山といひ、その附近に玉津島神社あり。社には衣通姫を祭ると、いひ居れども、實は稚日女命を祭れるものなるべしといへり。

も波はこゆるぎの、急ぐとしもはなけれども、日數積れば七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ著き給ひけれ。（卷の二）

三　大塔宮の熊野落

大塔宮は、南都の般若寺より、熊野の方に落ちさせ給ひしが、かくて紀の路に入らせ給ひ、由良の港を見渡せば、沖漕ぐ船の楫を絶え、浦の濱木綿幾重とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀の路の遠山渺々と、藤代の松にかゝれる磯の波、和歌吹上をよそに見て、月に瑩ける玉津島、光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎く習なるに、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、哀を催す時しもあれ、切目の王子に著き給へり。其の夜は叢祠の露に袖敷きて、通夜祈り給ひけり。（卷の五）

四　大塔宮十津川の旅

（一）深山の趣（大正十年、高等檢定試驗問題）

枕を敧て

萬仞の青壁劒に削り千丈の碧潭藍に染めり

（二）跋渉の艱難

はかゞ〳〵し

○後醍醐天皇吉野潛幸の事の條

（一）大塔宮は、十津川に尋ね入らせ給ひけるが、切目より三十餘里が間には、絶えて人里もなかりければ、或は高嶺の雲に枕を敧て、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍んで、朽ちたる橋に肝を消す。山路本より雨なうして、空翠常に衣を濕す。見上ぐれば萬仞の青壁劒に削り、見下せば千丈の碧潭藍に染めり。

（二）數日の間かゝる嶮難を經させ給へば、草臥れはてて、流るゝ汗水の如し。御足は缺け損じて、草鞋血に染れり。御供の人々も、其の身鐵石にあらざれば、皆飢ゑ疲れて、はかばかしくも歩み得ざりしが、御腰を推し、御手を挽いて、十三日の後に、十津河にぞ著かせ給ひける。（卷の五）

五　後醍醐天皇の還幸

（大正九年、小樽高商、入學試驗問題）

宸襟　蕭颯

楓橋の夜の泊

梁園の昔の御遊

○正行吉野に參る事

（明治四十三年、東京女高師、入學試驗問題）

安部野　攝津國東成郡にあり。

主上は重祚の御事相違候はじと、尊氏卿樣々申されたりしゐの語を御憑みあつて、山門より還幸成りしかども、元來謀り進らせむためなりしかば、花山院の故宮に押籠められさせ給ひ、宸襟を蕭颯たる寂寞の中に惱さる。　霜に響く遠寺の鐘に御枕を敧て、楓橋の夜の泊に御哀をそへられ、梢に餘る北山の雪に御簾を撥げては、梁園の昔の御遊に御涙を催さる。　紫宸に星を列ねし百司の老臣も、滿天の雲に掩はれ、參り仕ふる人一人もなければ、天下の事如何になりぬらむと、尋ね聞し召さるべき便もなし。（卷の十八）

六　正行卿の恩情

安部野の合戰は、正平二年霜月二十六日の事なれば、渡邊の橋よりせき落されて、流るゝ兵五百餘人、かひなき命を楠木

正平二年　紀元二〇〇七年に當る。

渡邊の橋　淀川に架せり。今の大阪の天神天滿二橋の間に當れりといふ。

楠木　正行なり。

色代（しきだい）

四條縄手　今は四條畷と書く。河內國中河內郡枚岡南村の地なり。

（一）參內奏上

淀　山城國久世郡にあり。

幡　山城國綴喜郡にあり。

隆資　藤原氏。

に助けられて、河より引き上げられたれども、秋の霜、肉を破り、曉の冰、膚に結びて、生くべしとも見えざりけるを、楠木情ある者なりければ、小袖を脫ぎ替へさせて身を暖め、藥を與へて疵を療せしむ。　四五日勞りて、馬に乘る者には馬を引き、物の具失へる人には物の具を著せて、色代してぞ送りける。　されば、敵ながら其の情を感ずる人は、今日より後、心を通ぜむ事を思ひ、其の恩を報ぜむとする人は、やがて彼の手に屬して後、四條縄手の合戰に討死をぞしける。（卷の二十六）

七　正行卿等の參內

（正行卿等の鎧の涙）

（一）京勢霞の如く、淀・八幡に著きぬと聞えしがば、楠木帶刀（たてはき）正行・舍弟正時、一族うち連れて、十二月二十七日吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは「父正成瓦弱の身

を以て、大敵の威を碎き、先朝の宸襟を休め進らせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻め上り候間、危きを見て命を致す所、かねて思ひ定め候ひけるかによつて、遂に攝州湊河にして討死仕り候ひ畢んぬ。其の時正行十一歳に罷り成り候ひしを、合戰の場には伴はで、河内に歸し、『死に殘り候はむずる一族を扶持し、朝敵を亡し、君を御代に卽け進らせよ。』と申し置きて死にて候ふ。

湊河　攝津國武庫郡にあり。

(二)奏上の語

手を碎き

有待の身

(二)　然るに正行・正時、已に壯年に及び候ひぬ。此の度、我と手を碎き合戰仕り候はずば、且は亡父の申しゝ遺言に違ひ、且は武略のいひがひなき謗に落つべく覺え候ふ。有待の身思ふに任せぬ習にて、病に冒され早世仕る事候ひなば、唯君の御爲には不忠の身となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候ふ間、今度師直・師泰に驅け合ひ、身命を盡し合戰仕つて、彼等が頭を正行が手に懸けて取り候ふか、正行・正時が首を彼等に取られ候ふか、其の二つの中に戰の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度、君の龍顏を拜し奉らむために、參内仕つて候ふ。」と、申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて、義心其の氣色に現れければ、傳奏未だ奏せざる前に、まづ直衣の袖をぞぬらされける。

雌雄を決す

直衣

(三)勅諭の旨

南殿　内裏の正殿なる紫宸殿の別稱なり。

(三)　主上則ち南殿の御簾を高く捲かせて、玉顏殊に麗しく、諸卒を照臨ありて、正行を近く召して、「以前兩度の戰に勝つ事を得て、敵軍に氣を屈せしむ。叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功かへすゝ〳〵も神妙なり。大敵今勢を盡して向ふなれば、今度の合戰天下の安否たるべし。進退度に當り、變

神妙

進退度に當り

化機に應ずる事は、勇士の心とする所なれば、今度の合戰手を下すべきにあらずと雖も、進むべきを知りて進むは、時を失はざらむが爲なり。退くべきを見て退くは、後を全うせむが爲なり。朕汝を以て股肱とす。慎んで命を全うすべし。」と仰せ出されければ、正行畏りて後に退出せり。

股肱

（四）聖廟に暇乞先皇　後醍醐天皇。

如意輪堂　吉野の奥、後醍醐天皇の塔尾御陵の下の山腹にある寺なり。

過去帳　（明治三十六年、專門、檢定試驗問題）

逆修（ぎゃくじゅ）

（四）正行・正時・和田新發意等百四十三人、先皇の御廟に參り、今度の軍難儀ならば、討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各名字を過去帳に書き連ねてその奥に、

返らじと　かねて思へば　梓弓
なき數にいる　名をぞとゞむる。

と、一首の歌を書き留め、逆修の爲と、各鬢髮を切つて佛殿に納め、その日吉野を出でて、敵陣へとぞ向ひける。（卷の二十六

（大正十年、東京商大、入學試驗問題）

○祇園精舍の事

（一）驕者の滅亡

祇園精舍　昔釋迦時代にありし印度の名高き寺の名なり。

沙羅雙樹　沙羅林中の雙樹。この林中大木二本づつ、四方に雙生せり。釋迦この樹下にて寂せしより、八本の大木、皆枯れきと言ひ傳へたり。

（二）清盛の驕僭

承平・天慶　朱雀天皇の朝の年號なり。

康和　堀河天皇の朝の年號なり。

第八篇　平家物語

著者未詳（一説、信濃前司行長。二説、葉室大納言時長。）

一　盛者必衰の理

（一）祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を現す。驕れる者久しからず。只春の夜の夢の如し。猛き人も遂には亡びぬ。偏に風の前の塵に同じ。遠く異朝をとぶらふに、秦の趙高漢の王莽、梁の周伊、唐の祿山、此等は皆舊主先皇の政にも從はず、樂を極め、諫をも思ひ入れず、天下の亂れむ事をも悟らず、民間の憂ふる所を知らざりしかば、久しからずして亡じにし者どもなり。

（二）近く本朝を窺ふに、承平の將門、天慶の純友、康和の義親、平治の信賴、此等は驕れることも猛き心も、みなとりどりしかども、間近くは、六波羅の入道、前の太政大臣平朝臣清

平治　二條天皇の朝の年號なり。

盛公と申しし人の有様傳へ承るこそ、心も言葉もおよばれね。（卷の一）

○教訓の事

二　重盛卿の諫言

（一）清盛入道の内意　法皇の御結構

（一）太政入道宣ひけるは、「あの成親卿の謀叛は、事の數にも候はず。一向法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を鎭めむ程、法皇をば鳥羽の北殿に遷し參らするか、然らずば、これにまれ御幸をなし參らせ、むと思ふはいかに。」と宣へば、大臣聞きもあへ給はず、はら〳〵とぞ泣かれける。

聞きもあへ給はず

（二）平家の衰運　いかにやいかに

（二）入道「さていかにや、いかに。」とあきれ給へば、やゝあつて大臣涙を抑へて、「この仰承り候ふに、御運ははや末になりぬと覺え候ふ。人の運命の傾かむとては、必ず惡事を思ひ立ち候ふなり。又御有様を見參らせ候ふに、更に現とも覺え

現とも覺えず

粟散　佛語。粟の如く散布せる小國をいへり。

天兒屋根命　藤原氏の祖なり。

ず候ふ。さすが我が朝は、邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫、國の主として、天兒屋根命の御末、朝の政を掌らせ給ひしより以來、太政大臣の官に至る人の甲冑を鎧ふ事、禮義を背くにあらずや。中んづく御出家の御身なり。それ三世の諸佛、解脫幢相の法衣をぬぎ捨てて、忽ちに甲冑を鎧ひ、弓箭を帶しましまさむ事、内には破戒無慙の罪を招くのみならず、外には仁義禮智信の法にも、背き候ひなむず。

解脫幢相の法衣

破戒無慙の罪

（三）朝恩の重大旨趣

（三）旁、恐ある申し事にて候へども、心の底に旨趣を殘すべきにも候はず。まづ世に四恩候ふ。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩是なり。中に最も重きは朝恩なり。普天の下王地にあらずといふことなし。されば潁川に耳を洗ひ、首陽山に薇を折

原本にしいしゆとあり。存念といふが如し。

普天の下云々　詩經、小雅、北山篇に、「普天之下、莫レ非二王土一、率土之濱、莫レ非二王臣一。」と見えたり。

（大正五年、米澤高工、入學試驗問題）

潁川の水に云云　昔、許由、堯帝の國を讓らむといふを聞き、穢れたりとて、潁川にて耳を洗ひたりといふ故事あり。

りし賢人も、勅命の背き難き禮義をば存知すこそ承れ。

四　いかに況んや、先祖にも未だ聞かざりし太政大臣を極めさせ給ふ。　謂はゆる重盛が無才愚暗の身を以て、蓮府槐門の位にいたる。　しかのみならず、國郡半は一門の所領となつて、田園悉く一家の進止たり。　これ希代の朝恩にあらずや。　これらの莫大の御恩を思し召し忘れさせ給ひて、亂りがはしく、法皇を傾け參らせ給はむ事、天照大神、正八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひなむず。　日本は神國なり。　神は、非禮を受け給ふべからず。

首陽山に云々　伯夷・叔齊、周の粟を食ふを欲せず、薇を食して、遂に餓死せし故事あり。

（四）希代の朝恩　蓮府槐門

五　悲しきかな、君の御爲に奉公の忠を致さむとすれは、迷盧八萬の巓よりも尚高き、父の恩忽ちに忘れなむとす。　痛ましきかな、不孝の罪を遁れむとすれば、君の御爲には不忠の逆臣ともなりぬべし。　進退是窮れり。　是非いかにも辨へ難し。　申し受くる所詮は、唯重盛が首を召され候へ。　されば院參の御供をも仕るべからず。　又院をも守護し參らすべからずと、直衣の袖しぼるばかり泣き給ひけり。（卷の二）

（五）進退窮る　迷盧　蘇迷盧の略語。須彌山といへるに同じ。

（明治四十年、大阪高工、入學試驗問題）

三　俊寛僧都の痛歎

○足摺の事

鬼界島の流人、丹波少將成經、平判官康賴入道は、船出せむとしければ、俊寛僧都は、船に乘りては下りつ、下りては乘りつ、あらまし事をぞし給ひける。　少將の形見には夜の衾、康賴入道が形見には一部の法華經をぞ留めける。　既に纜解きて船押し出せば、僧都綱に取りつき、腰になり脇になり、丈の立つまでは引かれて出づ。　丈も及ばずなりければ、僧都船に取りつき、いかに各、俊寛をば終に捨て果て給ふか、日頃の

あらまし事　形見　（大正二年、東京大農、入學試驗問題）

丈も及ばず

今は何ならず　情も今は何ならず。赦されなければ、都までこそ叶はずとも、せめてこの船に乗せて、九國の地まで。」と口説かれけれども、都の御使、「如何にも叶ひ候ふまじ。」とて、取り附き給ひつる手を引きのけて、船をばつひに漕ぎ出す。僧都せむかたなさに、渚に上り倒れ伏し、稚きものの乳母や母などを慕ふやうに足摺をして、「これ乗せて行け、具して行け。」と宣ひて、をめき叫びたまへども、漕ぎ行く船の習にて、跡は白波ばかりなり。（巻の三）

口説かれ

せむかたなさに

具して行け

○紅葉の事の條

御方違（おんかたたがへ）　陰陽家の説にて、他出の時、天一神の居る方角に當るを忌み、先づ他家に宿り、方角を違へて行くことをいふ。平安朝以來流行せり。

四　高倉天皇の仁慈

安元のころほひ、御方違の行幸のありしに、さらでだに鶏人暁を唱ふる聲、明王の眠をおどろかすほどにもなりしかば、いつも御寝覺がちにて、つや〳〵御寝もならざりけり。況んや、さゆる霜夜のはげしきには、延喜の聖代、國土の民どもがいかに寒かるらむとて、夜のおとゞにしては、御衣をぬがせ給ひける事などまでも思し召し出でて、わが帝德の至らぬ事をぞ御歎きありける。（巻の六）

さゆる霜夜

夜のおとゞ

五　平家の福原落

○福原落の事

（一）福原の悲哀

（一）明けぬれば、福原の内裏に火をかけて、主上を始め參らせて、人々皆船に召す。都を出でし程こそなけれども、これも名殘は惜しかりけり。海士の燒く藻の夕煙、尾の上の鹿の暁の聲、渚々に寄する波の音、袖に宿かる月の影、千草にすだく蟋蟀の聲、すべて目に見、耳に觸るゝことの、一つとして哀を催し、心を痛ましめずといふことなし。

尾の上の鹿（大正七年、小樽高商、入學試驗問題）

（二）盡させぬ涙　東關の麓に轡を竝べ

蟋蟀（きりぎりす）の聲

（二）昨日は東關の麓に轡を竝べて十萬餘騎、今日は西海の

極浦の波

雲居のよそ

在原の何がし　在原業平を指せり。「名にしおはばいざ言問はむ、わが思ふ都鳥、人はありやなしやと。」の歌あり

○逆櫓の事

逆櫓一引も引かじ　（明治四十年、東北大農、入學試驗問題）

波の上に纜を解いて七千餘人。雲海沈々として、青天已に暮れなむとす。孤島に夕霧隔てて、月海上に浮べり。極浦の波を分け、潮にひかれてゆく船は、半天の雲に遡る。日數經れば、都は山川程を隔てて、雲居のよそにぞなりにける。遙々來ぬと思へども、唯盡きせぬものは涙なり。波の上に白き鳥のむれ居るを見給ひては、彼ならむ在原の何がしの隅田川にて言問ひけむ、名もむつましき都鳥とはと哀なり。壽永二年七月二十五日に、平家都を落ちはてぬ。（卷の七）

六　義經逆櫓を拒む

判官義經、梶原に宣ひけるは、軍といふ者は一引も引かじと思ふだにも、あはひあしければ引くは常の習なり。固より逃げまうけしては、なじかはよかるべき。先づ門出のあしさよ。殿原の船には逆櫓をも返樣櫓をも、百挺千挺も立て給へ。義經は本の櫓にて候はむ。」と宣へば、梶原は「片趣なるをば、猪武者とてよきにはせず。」と申せば、判官、猪のしゝ鹿のしゝは知らず。「軍は平攻に攻めて勝ちたるぞ心地はよき。」と宣へり。侍ども同士軍あるべしといひあへり。（卷の十一）

返樣櫓

片趣

猪武者

平攻

○那須與一の事

（一）義經の指定

萌黃縅の鎧

切斑の矢

滋籐の弓

七　那須與一の扇の的

（一）與一その頃は、未だ二十ばかりの男なり。褐の直垂に、萌黃縅の鎧著て、二十四さいたる切斑の矢負ひ、滋籐の弓脇に挾み、冑をば脱いて高紐に懸け、判官の御前に畏る。判官、「いかに與一、あの扇の眞中射て、敵に見物せさせよかし。」と宣へば、與一、「仕るとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、長き身方の御弓の瑕にて候ふべし。一定仕らうずる仁

一定仕らうずる仁

下知（大正七年、鹿兒島農林、入學試驗出題）

（二）與一の決心

御諚

まろほや　寄木の模樣を圓く表したるものをいふ。

金覆輪の鞍

（三）晴の場所

に仰せ附けらるべうもや候ふらむ」と申しければ、判官大に怒つて「今度鎌倉を立つて西國へ向はむずる者どもは、皆下知を背くべからず。それに少しも仔細を存ぜむ人々は、これより、とう〳〵鎌倉へ歸らるべし。」とぞ宣ひける。

（二）與一重ねて辭せば、惡しかりなむとや思ひけむ。「さ候はば、外れむをば存じ候はず。御諚にて候へば、仕つてこそ見候はめ。」とて、御前を罷り立ち、黑き馬の太く逞しきに、まろほや摺つたる金覆輪の鞍置いて乘つたりけるが、弓取り直し、手綱かいくつて、汀へ向ひてぞ歩ませける。身方の兵ども、與一の後を遙に見送つて、「この若者、一定仕らうずると覺え候ふ。」と申しければ、判官も賴もしげにぞ見給ひける。

（三）元暦二年二月十八日、酉の刻ばかりの事なるに、折節北

元暦二年　安德天皇の朝。（紀元一八四五年）なり。

船はゆり上げ　ゆりする。

轡　くつぼみ

（四）與一の祈念

日光權現　下野國日光山にある二荒神社のことなり。

宇都宮　宇都宮市中の小丘にあり。

湯泉大明神　下野國那須郡那須村湯本にあり。

射させてたばせ給へ

（五）弓の矢の命中

よつぴいて

風烈しう吹きければ、磯うつ波も高かりけり。船はゆり上げゆりする。漂へば、扇も串に定らずひらめいたり。沖には平家船を一面に竝べて見物す。陸には源氏轡を竝べてこれを見る。いづれも〳〵晴ならずといふことなし。

（四）與一目を塞いで、「南無八幡大菩薩、別しては我が國の神明、日光權現・宇都宮・那須湯泉大明神、願はくはあの扇の眞中射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に再び面を向くべからず。今一度本國へ歸さむと思し召さば、この矢はづさせ給ふな。」と、心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹き弱つて、扇も射よげにこそなつたりけれ。

（五）與一鏑を取つて番ひ、よつぴいてひやうと放つ。小兵

十二束三伏
要際
皆紅の扇
箙をたゝいて

といふ條、十二束三伏、弓は強し。鏑は浦響く程に長鳴して、誤たず、扇の要際一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射切つたる。鏑は海に入りければ、扇は空へぞ揚りける。春風に一揉二揉もまれて、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の夕日のかゞやくに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ搖られけるを、沖には平家舷をたゝいて感じたり。陸には源氏箙をたゝいてどよめきけり。（巻の十一）

○大原御幸

八　後白河法皇大原の御幸

（一）法皇の御微行（明治三十八年、東京高師、入學試驗問題）
峯の白雪消えやらで

（一）人跡絶えたる御道筋

後白河法皇は、文治二年の春の比、建禮門院の大原の閑居の御住居、御覽ぜまほしう思し召されけれども、如月・彌生のほどは嵐烈しう、餘寒も未だ盡きず、峯の白雪消えやらで、

北祭
夜をこめて

谷のつらゝもうち解けず。かくて春過ぎ夏立ちて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて、大原の奥に御幸なる。しのびの御幸なりけれども、供奉の人々には公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。

（二）春の名殘
散りにし花の
かたみ
夏草の茂み

（明治三十九年、岡山醫專、大正五年、海軍機關、入學試驗問題）

（二）遠山にかゝる白雲は、散りにし花の形見なり。

青葉に見ゆる梢には、春の名殘ぞ惜まるゝ。頃は卯月二十日あまりの事なれば、夏草の茂みが末を分け入らせ給ふに、始めたる御幸なれば、御覽じなれたる方もなく、人跡絶えたる程も、思し召し知られてあはれなり。

（三）種々の風情
寂光院
山城國愛宕郡大原村にあり。

（三）寂光院の趣

西の山の麓に一宇の御堂あり。即ち寂光院是なり。舊う造りなせる泉水・木立、よしあるさまの處なり。「甍破れ

（大正七年、米澤高工、入學試驗問題）

甍破れては云云　この句出所未だ詳ならず。

不斷の香　常住の燈を挑ぐ

藤波のうら紫に咲ける花　八重立つ雲待ちがほ

（四）法皇の御詠歌

ことさらびよしある處　綠羅の垣　翠黛の山

ては霧不斷の香を燒き、扉落ちては月常住の燭を挑ぐ。」とは、かやうの處をや申すべき。庭の若草茂りあひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草波に漂ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松に懸れる藤波の、うら紫に咲ける花、青葉交りの遲櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲き亂れ、八重立つ雲の絶閒より、山郭公の一聲も、君のみゆきを待ちがほなり。

（四）法皇これを叡覽あつて、かうぞ遊ばされける。

池水に　みぎはの櫻　散りしきて
波の花こそ　盛なりけれ。

舊りにける岩の絶閒より、落ち來る水の音さへ、ことさらびよしある處なり。綠羅の垣、翠黛の山、繪に書くとも筆も及び難し。

（五）庵室の狀

瓢簞屢空し云云

和漢朗詠集、卷五に、「瓢簞屢空、草滋顏淵之巷、藜藿深鎖雨濕原憲之樞。」と見え、橘直幹が民部大輔を望みたりし申文の中の句なり。

（六）女院の恥しき御思

まさきのかづら

（三）女院の御庵室

（五）さて女院の御庵室を叡覽あるに、軒には蔦・朝顏這ひ懸り、しのぶ交りの忘草、「瓢簞屢空しく、草顏淵が巷に滋く、藜藿深く鎖して、雨原憲が樞を濕す。」ともいひつべし。板の葺目もまばらにて、時雨も霜も置く露も、漏る月影に爭ひて、たまるべしとも見えざりけり。後は山、前は野邊、いさゝ小笹に風さわぎ、世に立たぬ身の習として、うきふし繁き竹柱、都の方の言傳は、閒遠に結へるませ垣や。僅にことゝふものとては、嶺に木傳ふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、これらが音づれならでは、まさきのかづら青つゞら、くる人稀なる處なり。

（四）女院の御見參

（六）女院は世を厭ふ御習とはいひながら、今かゝる有樣を

消えも失せばや　宵々ごとの閼伽の水

見えまゐらせむずらむはづかしさよ。消えも失せばやと、思し召せどもかひぞなき。宵々ごとの閼伽の水、むすぶ袂もしをるゝに、曉起きの袖の上、山路の露もしげくして、しぼりやかねさせたまひけむ、山へも返らせたまはず、御庵室にも入らせおはしまさず、あきれて立たせおはしましたる處に、阿波内侍の尼參りつゝ、花筐をば賜りけり。

花筐（はながたみ）

（七）御見參

（七）「世を厭ふ御習、何か苦しう候ふべき。早々御見參ありて、還御なし參らせ候へ。」と申されければ、女院御涙を抑へて、御庵室に入らせおはしまします。「一念の窗の前には攝取の光明を期し、十念の柴の樞には聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思の外の御幸かな。」とて、御見參ありけり。（灌頂の巻）

攝取の光明
聖衆の來迎

第五類　紀行類

第九篇　奥の細道　松尾芭蕉

一　旅の用意

月日は百代の過客にして、往きかふ年もまた旅人なり。船の上に生をうかべ、馬の口とらへて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を住處とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風に誘はれて漂泊の思やまず、海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘の古巣を掃ひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關越えむと、そゞろ神の物につきて、心をくるはせ、道祖神の招にあひて、取る物手につかず。股引の破を綴り、笠の緒つけかへて、三里に灸す

松尾芭蕉は、名は宗房、伊賀に生れ、江戸に住み、德川時代俳諧の泰斗たりき。

月日は云々　李白の春夜宴桃李園序に、「天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客云々。」とあるに據れり。過客は旅人をいへり。

去年の秋　東山天皇元祿元年（紀元二三四八年）のことなり。

江上　江戸深川の地。

白河の關　磐城國西白河郡古關村大字旗宿にありて、奥州の關門なり。

道祖神

三里に灸す

杉風が別墅　江戸深川六間堀にありき。

(一)離別の涙　月は有明にて光をさまれるものから

千住　武蔵國南足立郡にあり、江戸東北の出口なり。

矢立の始

うるより、松島の月先づ心にかゝりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移る。

草の戸も　住みかはる代ぞ　雛の家。

二　江戸よりの旅立

(一)　彌生も末の七日、曙の空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の嶺かすかに見えて、上野・谷中の花の梢、またいつかはと心細し。　睦しき限は宵より集ひて、船に乘りて送る。

千住といふ所にて船をあがれば前途三千里の思胸に塞りて、幻の巷に離別の涙をそゝぐ。

行く春や　鳥啼き魚の　目は涙。

これを矢立の始として、行く道なほ進まず。　人々は途中に

(二)草加の宿　武蔵國北足立郡にあり。奥州街道に當れる驛なり。

元禄二年　東山天皇の朝、(紀元二三四九年)なり。

吳天　都に遠き地をいふ。

身すがら

さり難き餞

立ち竝びて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。

(二)　今年元禄二年にや、奥羽長途の行脚、たゞ假初に思ひ立ちて、吳天に白髮の恨を重ぬといへども、耳に觸れて未だ目に見ぬ境、もし生きて還らばと、定めなき頼の末をかけ、其の日漸く草加といふ宿に辿り著きにけり。　痩骨の肩にかゝれる物、先づ身を苦む。　唯身すがらにと出でたるを、紙子一衣は夜の防、浴衣・雨具・墨・筆の類、あるはさり難き餞などは、さすがにうち捨て難くて、路次の煩となれるこそわりなけれ。

三　野州の旅路

(一)　日光山の探勝

(一)日光の社參

(一)　卯月朔日、日光の御山に詣づ。　往昔この山を二荒山と書きしを、空海大師開基の時、日光と改め給へりと聞く。　千

八荒四民安堵の住處

歳未來をさとり給ひけるにや、今この御光一天に輝きて、恩澤八荒にあふれ、四民安堵の住處おだやかなり。

あらたふと　青葉若葉の　日の光。

(二)裏見の瀧

千岩の碧潭

裏見の瀧

(二)　黑髪山は霞かゝりて雪未だ白し。二十餘町山を登りて瀧あり。岩洞の頂より飛流して、百尺千岩の碧潭に落つ。窟に身をひそめて瀧の裏より見れば、裏見の瀧とぞいへる。

しばらくは　瀧にこもるや　夏の初。

(大正十年、廣島高師、入學試驗問題)

(三)　那須の旅路

那須の黑羽(くろばね)といふ處に知人あれば、直道を行かむとす。遙に一村を見かけてゆくに、雨降り日暮れぬ　農夫の家に一夜を借りて、明くれば又野中を行く。そこに野飼の馬あり。草刈るをのこに歎きよれば、野夫といへどもさすがに情知

うひ〳〵しき旅人

らぬにはあらず。「さてもこの野は縱横にわかれて、うひうひしき旅人の、道ふみたがへむもあやしう侍れば、この馬のとゞまる處にて馬を返し給へ。」とて貸しけり。小きもの二人、馬の跡慕ひて走りぬ。

(一)種々の風景

いかで都へ

拾遺集、平兼盛の、「便あらばいかで都へつげやらむ、けふ白河の關はこえぬと。」この歌を指せり。

理(こゝわり)

風騷の人

清輔

藤原清輔。二條天皇の頃の歌人なり。

曾良

芭蕉の門人、河合曾良。旅行の同伴者なり。

四　白河の關の旅路

(一)　心もとなき日數重るまゝに、白河の關にかゝりて旅心定りぬ。いかで都へと便求めしも理なり。中にも此の關は風騷の人心をとゞむ。秋風を耳に殘し、紅葉を俤にして、青葉の梢なほあはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にも越ゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣裳を改めし事など、清輔の筆にもとゞめ置かれぬ。

卯の花を　かざしに關の　晴著かな　曾良(そら)

(二)長途の苦

須賀川　岩代國岩瀬郡にあり。

鹽釜の明神　陸前國鹽釜町にあり。

國守再興　元祿二年、伊達綱村造營せり。

宮柱太しく　塵土の境

(二)とかくして越えゆくまゝに阿武隈川をわたる。影沼といふ所を行く。須賀川の驛に等躬といふ者を尋ねて、四五日留めらる。先づ白河の關いかに越えつるかと問はる。長途の苦、身心つかれ、且は風景に魂うばはれ、懷舊に腸を斷ちて、はかゞしう思ひめぐらさず。

風流の　はじめや奥の　田植歌。

五　鹽竈の明神詣

五月某の日、鹽竈の明神に詣づ。國守再興せられて、宮柱太しく、彩椽きらびやかに、石の階九仞にかさなり、朝日朱の玉垣をかゞやかす。かゝる道のはて塵土の境まで、神靈あらたにましますこそ、わが國の風俗なれと、いと尊し。神前に古き寶燈あり。かねの戸びらの面に「文治三年和泉三郎寄進。」とあり。五百年來の俤、今眼の前に浮びて、そゞろに珍し。かれは勇義忠孝の士なり。佳名今に至りて、慕はずといふ者なし。誠に人はよく道を勤め義を守るべし。名もまたこれに從ふ。

和泉三郎　藤原忠衡の通稱。秀衡の第三子なり。

(一)造化の天工

松島　陸前國宮城郡にあり。日本三景の一なり。

雄島　御島、小島とも記す。松島村瑞巖寺の西南、渡月橋を渡れる處にある島なり。

扶桑　我が國を指していへり。

西湖　支那・浙江省杭州府城の西にあり。

浙江　支那浙江省杭州府にあり。一名錢塘江といひ、海潮の奇を以て知らる。

六　松島の名勝

(一)日已に午にちかし。船をかりて松島に渡る。その間二里餘。雄島の磯に著く。抑ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭・西湖に恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ。島々の數を盡して、敲つものは天を指し、臥すものは波に匍匐ふ。或は二重にかさなり三重に疊みて、左に別れ右に連る。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の綠こまやかに、枝葉汐

風に吹き撓められて、屈曲自ら矯めたるが如し。千早振神代の昔、大山祇のなせる業にや、造化の天工、いづれの人か筆を揮ひ語を盡さむ。

(二)雄島が磯　雲居禪師　京都妙心寺の禪僧。伊達忠宗に聘せられて、松島瑞巌寺中興の祖となり、後西院天皇寛治二年(紀元二三一九年)寂せり。

(二) 雄島が磯は地續きて、海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。松の木蔭に世を厭ふ人も稀稀見えて、落葉・松毬などうち煙りたる草の庵、閑に住みなし、いかなる人とは知られずながら、先づ懷しく立ち寄る程に、月海に映りて晝の眺又改りぬ。江上に歸りて宿を求め、風雲の中に旅寢するこそ、怪しきまで妙なる心地はせらるれ。

松毬　松の實を包める毬狀の殼をいふ。

(三)瑞巌寺　臨濟宗、伊達家の廟所なり。

(三) 十一日、瑞巌寺に詣づ。當寺三十三世の昔、眞壁の平四郎出家して入唐、歸朝の後開山す。その後に雲居禪師の德化に依りて、七堂甍あらたまりて、金碧の莊嚴光を耀し、佛土成就の大伽藍とはなれりけり。

眞壁の平四郎　僧名法身。北條時頼時代の高僧なり。

七　平泉の舊蹟

(一)經路　平泉　陸中國西磐井郡平泉村の地、一關町の北方一里半許の處なり。

(一) 十二日、平泉へと志し、あねはの松、緒だえの橋など聞き傳へて、人跡稀に雉兎芻蕘の往きかふ道、そこともわかず、つひに路蹈みたがへて、石の卷といふ湊に出づ。「黄金花咲く。」と詠みて奉りけむ金華山、海上に見渡され數百の廻船入江につどひ、人家地を爭ひて、竈の煙立ち續きたり。思ひがけず、かゝる處にも來れるかなと、宿儆らむとすれど、更に貸す人なし。漸くまどしき小家に一夜をあかして、明くれば又知らぬ道迷ひ行く。袖の渡、尾駮の牧、眞野の萱原など、よそめに見て、遙なる堤を行く。心細き長沼に沿うて、戸伊摩といふ處に一宿して平泉に到る。その間二十餘里程と覺ゆ。

雉兎芻蕘の往きかふ道　陸前國、牡鹿郡にあり。

黄金花咲く　萬葉集、大伴家持の「すべらぎの御代榮えむと、あづまなるみちのく山に黄金花さく。」の歌を指していへり。

(二)舊蹟の狀

三代　藤原清衡、基衡、秀衡の三代をいへり。

泉が城　和泉三郎忠衡の居城なり。

(三)無量の感

慨國破れて云々　杜甫の春望の詩「國破山河在、城春草木深。」の句に據れり。

兼房　增尾權頭兼房。高館落城義經の臣。源義經の死後、城に火を放ち、自ら火中に投じて死せりといへり。

(四)光堂の有樣

(二)三代の榮耀一炊の中にして、大門の址は一里こなたにあり。秀衡が館の墟は田野になりて、金鷄山のみ形を遺せり。まづ高館に上れば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は泉が城を繞りて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡が舊蹟は、衣が關を隔てて南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。

(三)さても義臣すぐつてこの城に籠り、功名一時の叢となる。「國破れて山河あり、城春にして草青みたり。」と、笠うち敷きて、時の移るまで涙を落しぬ。

夏草や　つはものどもが　夢の跡

卯の花に　兼房見ゆる　白髮かな。　曾良

(四)かねて耳おどろかしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を遺し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散り失せて、珠の扉風に破れ、黃金の柱霜雪に朽ちて、已に頽廢空虛の叢と成るべきを、四面新に圍ひ、甍を覆ひて風雨を凌ぎ、暫時千歲の記念とはなれり。

五月雨の　降りのこしてや　光堂。

光堂　金色堂ともいふ。堀河天皇大仁二年(紀元一七六九年)藤原清衡の建立せる堂なり。

三尊　阿彌陀如來(中央)、觀世音菩薩(右)、勢至菩薩(左)をいへり。

七寶　もと金・銀・瑠璃・碼碯・瑪瑙・琥珀・珊瑚を合せていひしが、多くの寶物を指していふことになれり。

八　出羽の旅路

(一)最上の旅

(一)行きて出羽の國尾花澤に宿る。山形領に立石寺といふ山寺あり。慈覺大師の開基にて、殊に清閑の地なり。一見すべきよし人々の勸めければ、尾花澤よりとりてかへす。その間七里許なり。日未だ暮れず。麓の坊に宿かり置きて、山上の堂に登る。岩に巖を重ねて山とし、松柏年舊り、土

(一)立石寺の奇勝

尾花澤　羽前國北村山郡にあり。

立石寺　羽前國東村山郡山寺村にあり。

石老いて苔滑に、岩上の院々扉を閉ぢて物音聞えず。岩を匐ひて佛閣を拜し、住景寂寞として心すみゆくを覺ゆ。

しづけさや　岩にしみ入る　蟬の聲。

(二)最上川の景

最上川　水源を羽前國南置賜郡吾妻嶽より發して、酒田の海に注ぐ。

(二)　最上川は吾妻嶽より出で、山形の西方を下り、處々おそろしき難所あり。　板敷山の北を流れて、果は酒田の海に入る。　左右山おほひ、茂みの中に船を下す。　これに稻積みたるをや、稻舟とはいふならし。　白絲の瀧は青葉の隙々に落ち、仙人堂岸に臨みて立てり。　水漲りて舟危し。

五月雨を　あつめてはやし　最上川。

(三)　酒田の旅

酒田　羽後國飽海郡の西南端、最上川の注ぐ處にある町なり。

鶴が岡　羽前國西田川郡にあり。酒井侯の城地だりき。

六月某の日、羽黑山を立ち出で、鶴が岡より川舟に乘りて、酒田の湊に下る。　淵庵不玉といへる醫師の許に宿りぬ

溫海山や　吹浦かけて　夕すゞみ。

暑き日を　海に入れたり　最上川。

象潟　羽後國由利郡にあり。古來景勝を以て著る。

江山水陸の風光數を盡して、今象潟に方寸を責む　酒田の湊より東北の方、山を越え、磯を傳ひ、砂を蹈みて、其の際十里、日影やゝ傾く頃、汐風眞砂を吹き上げ、雨濛朧として鳥海の山隱る。　暗中に摸索して、雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色　たのもしと蜑の苫屋に膝を容れて雨の霽間を待つ。

蜑の苫屋

(三)　象潟の風景

(一)　かくて天よく晴れて、朝日花やかにさし出づる程に、象潟に舟を浮ぶ。　先づ能因島に舟をよせて、三年幽居の跡をとぶらひ、向の岸にあがれば、「花の上漕ぐ。」とよまれし櫻の老木、西行法師の記念をのこす。　寺を干滿珠寺といへり。

(一)象潟の古跡

花の上漕ぐ　西行法師の、「象潟の櫻は波にうづもれて、花の上漕ぐあまの釣舟。」の歌を指せり。

（二）象潟の眺望　むや〳〵の關　羽後國、飽海郡と利二郡の境なる、三崎峠の關所なり。

西施　支那古代の美人の名。こゝは只美人の意に用ひたり。

ねぶの花　ねぶは漢字にては、合歡木と記す。莨科に屬する落葉樹、夏期に花を開く。西施の眠を花に言ひ掛けたるなり。

市振の關　越後と越中との境にあり。

（二）方丈に坐して簾を捲けば、風景一目の中に盡きて、南に鳥海天をさゝへ、その影うつりて江にあり。西はむや〳〵の關路を限り、東に堤を築きて、秋田に通ふ道遙に、海北に構へて、浪うち入るゝ處を鹽越といふ。江の縦横一里許、俤松島に通ひて亦異なり。松島は笑ふが如く、象潟は怨むが如し。寂しさに悲みを加へて、地勢魂をなやますに似たり。

象潟や　雨に西施が　ねぶの花。

九　越の旅路

酒田のなごり日を重ねて、北陸道の山を望み、遙々の思胸を痛む。七月某の日、鼠が關を越え、越後の地に歩を改め、越中の國市振の關に到りぬ。この間九日、病起りて事を記さず。

荒海や　佐渡によこたふ　天の川。

（一）鬢の霜　身は浮雲に云云　白氏文集、送蕭處士遊嶺南詩中の「能文好飲老蕭郎、身似浮雲鬢似霜。」の句を指せり。

（二）都邊の住家　金張　漢の武帝に仕へし金日磾と張安世とを指せり。

七葉の榮　七代の榮華を極めしをいふ。

陶潛五柳　晉の陶淵明、清貧に甘んじ、宅邊に五柳を植ゑて、自ら五柳先生と號せり。

身は朝市に云云　文選、晉の王康琚の反招隱の詩の、「小隱隱陵藪、大隱隱朝市。」の句を指していへるなり。

第十篇　東關紀行

著者未詳（一説、源親行）

一　序

（一）齡は百年の半に近づきて、鬢の霜やうやくすゞしと雖も、なす事なくして、徒に明し暮すのみにあらず、さしていづこに住みはつべしとも、思ひ定めぬ有樣なれば、かの白樂天の、「身は浮雲に似たり、首は霜に似たり。」と書き給へる、哀に思ひ出でらる。

（二）もとより金張七葉の榮を好まず、唯陶潛五柳の住家求む。しかはあれども、深山の奥の柴の庵までも、しばらく思ひ休らふ程なれば、愁に都のほとりにすまひつゝ、人竝に世にふる道になむつらなれる。これ卽ち身は朝市にありて、心は隱遁にあるいはれなり。

（三）後の記念

（三）かゝる程に、思はぬ外に、仁治三年の秋八月十日あまりの頃、都を出でて東へ赴くことあり。まだ知らぬ道の空、山重り江重りて、はる〳〵遠き旅なれども、雲を凌ぎ霧を分けつゝ、しばらく前途のきはまりなきに進む。終に十餘の日數を經て、鎌倉に下り著きし間、或は山館・野亭の夜のとまり、或は海邊・水流の幽かなる砌に至る毎に、目にたつ處々、心とまる節々を書き置きて、忘れず忍ぶ人もあらば、自ら後のかたみにもなれとてなり。

山館・野亭

二　近江の旅路

（一）逢阪越

東山の邊なる住家を出でて、逢阪の關うち過ぐる程に、駒引きわたる望月の頃も、やう〳〵近き空なれば、秋霧立ちわたりて、深き夜の月影ほのかなり。木綿附鳥かすかに音づれて、遊子猶殘月に行きけむ、函谷の有樣思ひいでらる。昔蟬丸といひける世捨人、この關のほとりに藁屋の床を結びて、常は琵琶を彈きて心をすまし、大和歌を詠じて思を述べけり。嵐の風はげしきをわびつゝぞすぐしける。あはれと思ひてよめる

いにしへの　藁屋の床の　あたりまで
こゝろを留むる　逢阪の關。

東山　京都の東方諸山の總稱なり。

逢阪　近江國滋賀郡にあり。大津市の南に當る。

木綿附鳥（ふつけどり）

遊子猶殘月に行々

遊子は旅人。齊の孟嘗君を指せり。文選、賈島の曉賦に、「猶行二於殘月一。函谷鷄鳴」とあるに據れるなり。

函谷　函谷關。支那、河南省にあり。

蟬丸　宇多天皇第八の皇子敦實親王の雜色なりきといへり。

（二）志賀の古里

關山を過ぎぬれば、打出の濱、粟津の原なんど聞けども、いまだ夜のうちなれば、さだかにも見えわかず。昔天智天皇の御代、大和の國飛鳥の岡本の宮より、近江の志賀の郡に都う

打出の濱、粟津の原　近江國滋賀郡にあり。

飛鳥　大和國高市郡にあり。

大津の宮

つりありて、大津の宮を造られけりと聞くにも、この程は古き皇居の跡ぞかしと覺えてあはれなり。

さゞ波や　大津の宮の　あれしより
名のみ殘れる　志賀のふるさと。

滿誓沙彌（俗名笠麻呂。元明天皇・元正天皇の時代頃の人なり。）

（三）跡の白波

曙の空になりて、瀨田の長橋うち渡す程に、湖はるかにあらはれて、かの滿誓沙彌が比叡山にて、この海を望みつゝ詠めりけむ歌思ひ出でられて、「漕ぎゆく舟の跡の白波」まことにはかなく心ぼそし。

世の中を　漕ぎ行く舟に　よそへつゝ
ながめし跡を　またぞながむる。

比叡山にて云云（「世の中を何にたとへむ朝ぼらけ、漕ぎ行く船の跡の白波」拾遺集に見ゆ。）

（四）野路の篠原

野路（近江國栗太郡にあり。）

（一）篠原の眺望

袖の雫處せし

（一）この程をも行き過ぎて、野路といふ處にいたりぬ。草の原露しげくして、旅衣いつしか袖の雫處せし。篠原といふ處を見れば、西東へ遙に長き堤あり。北には里人住家を占め、南には池のおもて遠く見えわたる。むかひの汀、綠深き松のむら立、波の色もひとつになり、南山の影を浸さねども、青くして滉瀁たり。洲崎處々に入りちがひて、蘆かつみなど生ひ渡れる中に、鴛鴦・鴨のうち群れて飛びちがふさま、葦手を書けるやうなり。

南山の影云云（白氏文集、昆明春水滿の詩「池岸古春流新。影浸南山青滉瀁。」の句に據れり。）

葦手

（二）變れる有樣

（二）都を立つ旅人、この宿に泊りけるが、今はうち過ぐるたぐひのみ多くして、家居もまばらになり行くなど聞くこそ、かはりゆく世のならひ、飛鳥の川の淵瀨には限らざりけめと覺ゆ。

飛鳥の川の淵瀨

行く人も　とまらぬ里と　なりしより
荒れのみまさる　野路の篠原

武佐寺　近江國蒲生郡武佐村にあり。

（五）武佐寺のあたり

ゆき暮れぬれば、武佐寺といふ山寺のあたりに泊りぬ。まばらなるとこの秋風、夜ふくるまゝに身にしみて、都にはいつしか引きかへたる心地す。枕に近き鐘の聲、曉の空におとづれて、かの遺愛寺の邊の草の庵の寢覺も、かくやありけむと哀なり。行末とほき旅の空、思ひつゞけられて、いとたう物がなし。

「床」に「鳥籠の山」を言ひ掛けたり。鳥籠の山は近江國犬上郡にあり。

遺愛寺の云々　白氏文集の「遺愛寺鐘欹枕聽。香爐峯雪撥簾看。」の詩句を指せり。

都出でて　いくかもあらぬ　こよひだに
片しきわびぬ　とこの秋かぜ。

（六）醒が井の水

醒が井　近江國阪田郡にあり。

音に聞きし醒が井を見れば、蔭暗き木の下の岩根より流れ出づる清水、餘り涼しきまで澄み渡りて、げに身にしむばかりなり。餘熱未だ盡きざる程なれば、往還の旅人多く立ち寄りて涼みあへり。かの西行が、「道のべに清水流るゝ柳蔭、しばしとてこそ立ち留りつれ。」と詠めるも、かやうの處にや。

餘熱未だ盡きざる程

道のべに云々　新古今集、夏の部に、「題知らず」の歌として見えたり。

道のべの　木蔭の清水　むすぶとて
しばしすゞまぬ　旅人ぞなき。

三　美濃の旅路

（一）不破の關越

（大正十二年、旅順工科大學、入學試驗問題）

柏原といふ處を立ちて、美濃の國關山にもかゝりぬ。谷川霧の底に音づれ、山風松の梢にしぐれ渡りて、日影も見えぬ木の下道、あはれに心細し。越えはてぬれば、不破の關屋な

不破の關　美濃國不破郡にあり。

後京極攝政殿　藤原良經。土御門天皇の時代頃の人なり。

荒れし後は云云　關路秋風、「人住まぬ不破の關屋の板びさし、荒れにし後はたゞ秋の風。」と新古今集に見えたり。

株瀨川　美濃國不破郡にあり。

照る月竝も云云　拾遺集、源順の「水の面に照る月なみを數ふれば、今宵ぞ秋の最中なりける。」の歌に據れり。

二千里の外云云　白氏文集の「三五夜中新月色。二千里外故人心。」の句に據れり。

り。萱屋の板庇、年經にけりと見ゆるにも後京極攝政殿の、「荒れにし後はたゞ秋の風。」と、詠ませ給へる歌思ひ出でられて、この上は風情もめぐらしがたければ、いやしき言の葉を遺さむも、なか〳〵に覺えて、こゝをば空しくうち過ぎぬ。

（二）株瀨川の宿り

株瀨川といふ處に泊りて、夜更くる程に、川端に立ち出でて見れば、秋の最中の晴天、清き川瀨にうつろひて、照る月竝も數見ゆるばかり澄み渡れり。二千里の外の故人の心、遠く思ひやられて、旅の思いとゞ抑へ難く覺ゆれば、月の影に筆を染めつゝ、「花洛を出でて三日、株瀨川に宿して一宵、屢〻幽吟を中秋三五夜の月に傷ましめ、かつ〴〵遠情を先途一千里の雲に送る」など、ある家の障子に書きつくるついでに、

知らざりき　秋のなかばの　こよひしも
かゝる旅寢の　月を見むとは。

四　尾張の旅路　熱田の宮のさま

（一）尾張の國熱田の宮に到りぬ。神垣のあたり近ければ、やがて參りて拜み奉るに、木立年ふりたる森の木の間より、夕月の影たえ〴〵さし入りて、朱の玉垣色をそへたるに、木綿四手風に亂れたることがら、物にふれて神さびたる中にも、ねぐら爭ふ鷺むらの、數も知らず梢に來ゐるさま、雪の積れるやうに見えて、遠く白きものから、暮れ行くまゝに、しづまりゆく聲々も心すごく聞ゆ。

（二）この宮を立ち出でて、濱路に赴くほど、有明の月影ふけて、友なし千鳥時々おとづれわたれる旅の空の愁、すゞろに

（一）熱田の宮の有樣　熱田の宮　愛知郡にあり。

朱の玉垣　木綿四手

（二）濱路の哀　（大正七年、高等學校、入學試驗問題）

友なし千鳥

かたゞ

もよほして、哀かたゞ深し。

故郷は　日を經て遠く　なるみがた
いそぐ汐干の　道ぞくるしき。

在原業平云々 伊勢物語に、業平「八橋にて」かきつゝなれにしつましあれば、はるゝ來ぬるたびをしぞ思ふ。」とよめりければ、皆人餉の上に涙落しておのびにけり。」と見えたり。

燕子花 かきつばた かれいひ

五　三河の旅路

（一）八橋のわたり

ゆきゝて三河の國八橋のわたりを見れば在原業平、燕子花の歌よみたりけるに、皆人かれいひの上に涙落しける處よと思ひいでられて、そのあたりを見れども、かの草とおぼしき物はなくて、稻のみぞ多く見ゆる。

花ゆゑに　落ちし涙の　形見とや
稻葉の露を　のこしおくらむ。

矢矧を出でて、宮路山越えすぐる程に、赤阪の宿に到りぬ。

本野が原 三河國寶飯郡にあり。（明治四十一年、高等學校、入學試驗問題）

武藏の前司 北條泰時のことなり。

かつゞ道のしるべ

天龍川 遠江國、濱名磐田二郡の境を流るゝ川なり。

（二）本野が原のあはれ

本野が原にうち出でたれば、よもの望かすかにして、山なく岡なく、草土共に蒼茫たり。月の夜の望いかならむと、ゆかしく覺ゆ。茂れる笹原の中に、あまた蹈み分けたる道ありて、行末も迷ひぬべきに、故の武藏の前司、道のたよりの輩に仰せて、植ゑおかれたる柳も、未だ蔭と賴むまではなけれども、かつゞ道のしるべとなれるも哀なり。

六　遠江の旅路

天龍川の渡

天龍と名づけたるわたりあり。川深く流はげしく見ゆ。秋の水漲り來て、船の去ること速なれば、往還の旅人たやすく向の岸に著きがたし。この川、水まされる時、舟などもおのづから覆りて、底の水屑となる類多かりと聞くこそ、彼の

巫峽の水云々　白氏文集に、「巫峽之水能覆舟。若比君心是安流。（中略）行路難不在水只在人情反覆間。」と見えたり。

梶原　梶原景時。

年々に春の草云々　白氏文集、續古詩に「古墓何代人。不知姓與名。化作路傍土。年年春草生。」と見えたり

巫峽の水の流思ひ寄せられて、いと危き心地すれ。しかはあれども、人の心に較ぶれば、靜なる流ぞかしと思ふにも、譬ふべき方なきは、世に經る道のけはしき習なり。

この川のはやき流も　世の中の
人のこゝろの　たぐひとは見ず。

七　駿河の旅路

（一）梶原が墓のあはれ

尚うち過ぐるほどに、ある木蔭に石を高く積み上げて、目に立つさまなる塚あり。人に尋ぬれば、梶原が墓となむ答ふ道の傍の土となりにけりと見ゆるにも、「年々に春の草のみ生ひたり。」といへる詩思ひいでられて、これも亦古き塚となりなば、名だにも殘らじと哀なり。かの梶原は、將軍二代の

將軍二代　源頼朝・頼家をいふ。

三略　張良が黄石公より傳へられし兵書の名なり。

ひとゝき　一本に「ひとま」ともあり。一先づの意なり。

黄川　所在不明なり。

恩におごり、武勇三略の名を得て、傍に人なくぞ見えける。いかなる事にかありけむ、かたへの憤深くして、忽ちに身を滅すべきになりければ、ひとゝきも延びむとや思ひけむ、都の方へ馳せ上りける程に、駿河の國黄川といふ處にて、討たれにけりと聞きしが、さは此處にてありけるよと、哀に思ひいでらる。

（二）浮島が原の眺

（一）處々の展望　浮島が原　駿河國庵原郡にあり。

蘆刈小舟　あしかりをぶね

雲の波煙の波

（二）浮島が原はいづくよりもまさりて見ゆ。北は富士の麓にて、西東へはる〳〵と長き沼あり。布を引けるが如し。山の綠影を浸して、空も水もひとつなり。蘆刈小舟處々に棹さして、群れたる鳥多くさわぎたり。南は海の面遠く見渡されて、雲の波、煙の波、いと深きながめなり。すべて孤島

遠帆の空に連れるを望む

鹽屋の煙

の眼に遮るなし。わづかに遠帆の空に連れるを望む。こなたかなたの眺望、何れもとり〴〵に心細し。原には鹽屋の煙たえ〴〵立ちわたりて、浦風松の梢に咽ぶ。

(二)神仙の栖處

蓬萊の三つの島

(二)この原、昔は海の上に浮びて、蓬萊の三つの島の如くにありけるによりて、浮島となむ名づけたると聞くにも、自ら神仙の栖處にもやあらむ、いとゞ奥ゆかしく見ゆ。

千本の松原

駿河國駿東郡沼津町の海岸にあり。

影ひたす　沼の入江に　富士のねの
　　けむりも雲も　うき島がはら。

やがてこの原につぎて、千本の松原といふ處あり。海の渚遠からず、松遙に生ひわたりて、緑の蔭きはもなし。沖には舟ども行きちがひて、木の葉の浮けるやうに見ゆ。

八　鎌倉の逗留　都の慕はしさ

(一)數ならぬ身

(一)鎌倉の事どもを見聞くにも、心とまらずしもはなけれども、文にもくらく武にもかけて、つひに住みはつべきよすがもなき、數ならぬ身なれば、日を經るまゝには、唯都のみぞ慕はしき。歸るべき程と思ひしも、空しく過ぎゆきて、秋より冬にもなりぬ。

(二)懷古の心

蘇武

漢の武帝の時、匈奴に使して、十九年間抑留せられし事あり。

李陵

漢の武帝の時、匈奴を征し、生擒せられて、遂に匈奴に降りし事あり。

(二)蘇武が漢を別れし十九年の旅の愁、李陵が胡に入りし三千里の道の思、身に知らるゝ心地す。聞きなれし蟲の聲もやゝ弱りはてて、松吹く峯の嵐のみぞいとゞ烈しくなりまされる。懷古の心に催されて、つく〴〵と都の方を眺めやる折しも、一行の雁がね、空に消え行くもあはれなり

歸るべき　春をたのむの　雁がねも
　　なきてや旅の　空に出でにし。

（明治四十年、金澤醫專、入學試驗問題）

かんな月　語原神嘗月なるを、神無月と書くは宛字なり。

朱買臣　吳の人、家貧なりしが、後故郷の會稽の太守となれり。漢書に、「上謂買臣曰、富貴不レ歸レ故鄉、如レ衣レ繡夜行、今子如何。」と見えたり。

九　鎌倉より歸京

かゝる程に、かんな月の二十日あまりの頃、圖らざるにとみの事ありて、都へ歸るべきになりぬ。その心の中、水莖の跡にも書き流しがたし。錦を著る榮は、固より望む所にあらねども、故郷に歸る喜は、朱買臣に相似たる心地す。

故郷に　かへる山路の　木がらしに
おもはぬほかの　錦をや著む。

十月二十三日の曉、鎌倉を立ちて都へ歸らむとするに、宿の障子に書きつく。

なれぬれば　都を急ぐ　今朝なれど
さすが名殘の　惜しき宿かな。

高山林次郎は、樗牛と號し、羽前の人、文章を以て聞えたり。

（一）百世の儀表　釋迦　西曆紀元前凡そ六百年の頃に生存せりといふ。

孔子　西曆紀元前五百五十一年（綏靖天皇三十一年）に生れ、七十三歲にて歿せり。

ソクラテス　西曆紀元前凡そ四百七十年の頃に生存せりといふ。

基督　西曆紀元第一年は、その誕生の年なり。

（二）四聖の境遇　轗軻不遇

第六類　現代文類

第十一篇　樗牛全集

高山林次郎

第一　聖教類

一　世界の四聖

（一）生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる、聖人にあらずんば、誰かこれを能くせむや。釋迦・孔子・ソクラテス・基督の四人、世呼んで世界の四聖と稱す、宜なるかな。此の四聖は、其の人物事績の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し崇拜する所なり。

（二）而して四聖の中、釋迦を除きては、いづれも轗軻不遇の間に其の生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、其の經綸

を抱いて、空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテスと基督とは、いづれも讒人の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と竝びて、十字架上に釘殺せられぬ。慘憺たりと謂ふべし。

（三）四聖の所志

（三）然れども、此等の人々の志す所は天下後世にあり。現世の禍福と一身の安危とは、毫も其の顧慮する所にあらず。故に其の死に就くや、晏如として恰も歸するが如し。

晏如

（四）永遠の救濟者（大正九年、專門檢定試驗問題）

（四）嗚呼、四聖逝いて既に幾千年ぞ。而してその敎の、今なほ凜々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、その敎に據りて道念を養ひ、其の安慰を求む。四聖の如きは、實に人類の永遠なる救濟者なりと謂ふべし。其の遺德の高大なること、何を以てか之に比せむや。

生氣
道念

二　孔子の經歷

（一）四方の遊說

（一）孔子名は丘、孔子は其の尊稱なり。今を去る二千一百餘年の昔、支那の魯國に生る。幼にして學を好み禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、傍ら子弟を敎へて、夙に令聞あり、學德愈〻進む。魯の定公の時に至り、擢んでられて大司寇の職に就く。治績大いに擧り、內外其の風采を想望す。時に齊王、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歲の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて、四方の遊說を試みぬ。

令聞

時運

（二）當時の情勢

（二）當時の支那は、謂はゆる春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を拂へり。或は臣にして其の君を弑するものあり、子にして其の親を害するものあり、强は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に道

蕩然

教化の陵夷

義あるなし。教化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時の如きはあらざりき。

(三)道義の主唱

大義名分

（大正六年、東北工學、入學試驗問題）

(三) 孔子已に志を魯に得ず。乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に翻さむとせり。その志や高且大なりと謂ふべし。此の如くにして、四方を漂浪すること十三年、時非にして道容れられず。世復耳を名教に傾くる者なし。是に於いて已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰はく、嗚呼、吾が道遂に窮せり。世遂に吾を知る者なきかと。門弟子貢慰めて曰はく、何ぞ夫子を知る者なからむやと。孔子曰はく、天を怨みず、人を尤めず、下學して上達す。吾を知る者はそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを痛む。吾が道行はれずんば、吾何

老脚蹉跎

下學して上達す

を以てか後世に見えむやと。幾ばくもなく歿しぬ。時に年七十三なりき。

（大正十一年、山口高商、入學試驗問題）

百行の本

後天の氣質

教育の要

治國平天下

三　孔子の教義

孔子の教義は、身を修め、家を齊へ、天下を治むるにあり。而して身を修むる基は孝にあり。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆之に基づく。人は生れながらにして、美德を天に稟くれども、後天の氣質に因りて、これを完うする能はざるもの多し。教育の要是に於いてあり。既に教育を受けて、身已に修らば、家自ら齊ふべく、家齊はば、國自ら治るべく、國治らば、天下自ら泰平なるを得べし。故に孔子の教は、一身の修養に始りて、治國平天下に終るものと見るべし。

（一）略歴
無上の正覺
巡錫布教
（二）佛教の確定
思索の高遠
一世の元々
歸命の大道
一世の木鐸

四　釋迦の經歴

（一）釋迦は、西暦紀元前凡そ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生れぬ。夙に思を人生の問題に潛め、遂に無上の正覺に徹底し、五十餘年の間巡錫布教して、八十餘歳にて歿せり。

（二）今の佛教は、卽ち釋迦一代の教訓に基づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど徒に思索の高遠を尚びて、人生の疑問に適切ならず。偏に幽玄なる談理と、慘憺たる苦行とによりて、安心の道を求めたり。其の流派を樹てて相爭ふ所は、畢竟名目上の優劣のみ。未だ一世の元々をして、歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生れ、其の浩大なる慈悲と、無邊なる智慧とを以て、一世の木鐸となり、民をして其の歸依する所を知らしめたり。

煩惱
涅槃
生老病死
無我無念の境界
究竟の樂地
（一）菅公の境遇（大正九年、山口高商、入學試驗問題）
絶好の詩境

五　釋迦の教義

釋迦の教義は、煩惱を斷滅して涅槃に達するを主旨とす。それ人生は苦に始りて苦に終る。生老病死孰れか苦にあらざるべき。故に吾人は、現世を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾にあり。情慾の原因は、我の一念に執著するにあり。故に吾人は、我の一念を脫却して、無我無念の境界に達せざるべからず。是人生究竟の樂地にして涅槃卽ち是なり。（第三卷）

第二　史論類

六　菅公の詩才

（一）太宰府の配居は、公に取りては絶好の詩境なりき。外に名利の競爭なく、內に危殆の憂悶なし。公や靜に往時を

詩人の天分

懷慕し、現境を思料し、咏嘆によりて其の哀情を遣るべきなり。天は公に授くるに、詩人の天分を以てし、而して先づ公に與ふるに、政治家の境遇を以てしたりき。公の政治家たりしや、煩惱内に公を苦め、讒奸外に公を陷れ、遂に公をして無告の流人たらしめき。

無告の流人

(二)菅公の天分

(二)然れども、悲しいかな、此の如くするにあらざれば、公は遂に詩人たる能はざりしなり。而も公は死に至るまで、此の天分の地に居るを悲み、靜に春秋の榮落を觀じて、何時か

春秋の榮落

は昔日の榮華に歸るあらむことを望みたりき。此の憂愁と希望との現るゝ所に、公の天分は遂に大成せられたり。而して公自らは毫も之を知らざりしなり。嗚呼、天道の冷酷無情、何ぞ一に是に至るや。(第三卷)

天道の冷酷

七　平重盛の行爲

(一)佛の歸依

來世を希求せしもの

(明治四十年、仙臺高工、入學試驗問題)

(大正二年、專門、檢定試驗問題)

骨肉の私情

云爲の先後

(二)私情の拘束

事局を回避す

(一)重盛年なほ壯にして、夙に厭世の心を動し、早く佛說に歸依して來世を希求せしもの、其の境遇の自ら然らしめし所、その情や深く憐むべしとせむ。然れども、此の佛說に歸依せる事は、重盛に取りては、寧ろ恨事なりきと謂はざるを得ず。彼身は一國の大臣として、奉公の大義を辨ずるもの、宜しく忠を勵み道を盡し、斃れて後に已むべきなり。洵に忠孝兩全し難くして、骨肉の私情さすがに絕ち易からざれど、事體の大小、云爲の先後、必ずしも辨じ難からず。何ぞ妄に一身の安慰を冥々の後にのみ求むべしとせむ。

(二)此の難關に當りて、能く功を擧ぐるもの、眞に人傑といふべきなり。重盛たるもの、輕々しく事局を回避して、自ら

全うすべからざりしなり。彼の熊野に禱る詞を見るに、要は一門の榮華永きを保たじ、寧ろ死して其の末路に遭遇せざらむといふにあり。何ぞその願の私情に拘ることの多くして、公義に盡すことの少きか。

公義に盡す

(三) 彼の一身は、公私内外の望の由つて繫る所、君は以て泰きを得、父は以て正しきを得、洵に一門の柱石、一世の儀表たり。彼死せば、入道が暴横は、さながら悍馬の御に離れしが如けむ。帝座の危きや知るべきなり。彼死せば、一家の望立ちどころに世に離るべし。一旦事あらむ日、誰か能く擁護の任に當るべき。一門の危きや亦知るべきなり。重盛たるもの、何ぞ區々の私情のために逃避すべけむや（第三卷）

(三) 一身の地位

一門の柱石

一世の儀表

第十二篇　東圃遺稿

藤岡作太郎

藤岡作太郎は、東圃と號し、加賀の人、文章に長じたり。（大正三年、廣島高師、入學試驗問題）

第一　史評類

一　平家物語の趣味

祇園精舎の鐘の聲

沙羅雙樹の花の色

祇園精舎の鐘の聲、沙羅雙樹の花の色、卷を開いてまづ響く琅々の調は、流麗にしてまた悽慘なり。二十年の榮華の夢、昨日は樓臺の花の宴に杯を廻らし、今日は海上に楫を枕に月に泣く。

有爲轉變の世の習

有爲轉變の世の習とはいひながら、榮枯盛衰掌を覆すこと、平家の一門の如きは、古今東西に例少く、ありのまゝの事實は、詩人の空想を待たずして、さながらの戲曲なり。

一篇の樞軸

その局面の波瀾に富めるは、卽ち平家物語の七百年後の今日も、なほ世人に愛讀せらるゝ所以にして、一篇の樞軸たる大人物は、いふまでもなく太政入道淨海なり。

二　大人物の戲曲的興味

（一）社會の現象　戲曲　咆哮

（二）社會的行動　時代の思潮　戲曲的興味

（一）社會の現象を一の戲曲として見れば、群衆の共に東奔西走して、これを率ゐる偉人なきは、無趣味なる散文に過ぎずして、神の如き大人物が咆哮して、世俗と戰ひ、運命に抗するは、名人の筆に成れる大詩篇なり。

（二）然れども、才能あり權威ある大人物が、世に出でたるありとも、その方向を誤つて、時代の思潮に觸れず、その行動の社會一般の趨勢と關係なき時は、余輩がその一生に對して感ずる戲曲的興味また甚だ少し。戰國擾亂の時、武田上杉の戰鬪、壯は壯なりといへども、唯戰はむが爲に戰ひしのみ、その戰やまた時運の然らしむる所なりといへども、川中島の戰の爲に、當代の大勢は動されたることなかりき。

（一）畫家の唱道　時運の機微

（二）悲劇的運命（大正四年、黃島高師、入學試驗問題）　破綻を起す　蛙鳴蟬噪

三　清盛の運命

（一）丹青界に於ける曾我蕭白の唱道、また雄なりとすべけれども、陳腐なる東山復興說は、明和・安永の思想と、何等の交渉する所なく、應擧を目して繪圖引と罵れども、時運の機微を察して、寫生に移れる渠應擧は、却つて一世を統率するに至れり。

（二）されば余輩が、歷史上の事實を一の戲曲として、最も興味を感ずるは、壯大なる偉人と、時代の思潮と交渉する際に衝突を生じ、破綻を起す所にあり。社會より離れて孤立せる人物は、敢へて與らず。紛々擾々たる群衆の蛙鳴蟬噪も、敢へて與らず。この點より見て、悲劇的運命を具有したる歷史的人物は、清盛を措いて他に誰かある。

（一）福原の遷都　福原は攝津國武庫郡にあり。
左牴右牾　頂天立地
（二）公卿の後塵　藤家の搢紳
後塵を拜し

四　平家の末路

（一）清盛福原遷都の擧は、都鄙の連絡を敏活ならしめむがため、四通八達の地を選びし事、重なる原因なるべけれども、左牴右牾、逼迫の絶えざる舊都を避けて、頂天立地、自由に活動すべき新市を開く事、亦その一理由ならずとせむや。

（二）憐むべし、一門親族、洛陽の花に親み、風習の軟化既に膏肓に入り、比叡の山、鴨川の邊、山綠に水清き舊棲を慕うて、藤家の搢紳と共に、追憶の涙頻に袂を濡せり。かくて一年にも及ばず、百官の愁歎强請に堪へかねて、鳳輦また京都に還御あり。平家が公卿を蹂躪したるが如くにして、その實公卿の後塵を拜し、剛健の俗忽ち化して、婉柔の風に移れるを思へば、更に研磨精練せる地方の武士が、暴風の如く襲來することあらむ時、管絃和歌の威德を以て、よくこれを退くべきか。危しとも亦危からずや。

（三）一門の滅亡
紈袴の子弟
西海の底の藻屑
盧生の夢

（三）果せるかな、高倉宮の令旨を奉じて、諸國の源氏群蜂の如く起ち、危機一髮の際、清盛は熱病に罹り、後事を慮りながら悶死したりき。紈袴の子弟、如何ぞ阪東・木曾の荒し男と干戈を交ふべき。義仲の襲擊に、平家の一門一たまりもなく都を落ち、範頼・義經の追躡に、四國九州と逃げ巡りたる果、遂に眷族を擧げて、西海の底の藻屑と沈みけり。花の如く咲きて、花の如く散りにし二十年の榮枯盛衰、顧みれば盧生の夢よりも果敢なかりけり。

第二　名蹟類

五　大原の風情

(一)大原の地勢

八瀬（山城國愛宕郡にある村名なり。）

賤が家の一團

(二)四季の景物

朧の清水

音無の瀧

呂律の川（音無の瀧の下流の分れたる二川の名なり。）

(三)大原の閑寂

(一)　八瀬より北に行くこと凡そ一里、地俄に開けて平闊なり。　四方は連山波濤の如く廻りて、前は小比叡の山近く迫り、後は比良の高嶺も遠からず。　彼方は鞍馬・貴船に續けり。恰も摺鉢の底の如き地を占めて、彼處此處の山の麓に、細き煙を立つる賤が家の一團あり。　端戸・上野・大長瀬・草生などの數合せて八、これを總稱して大原といふ。

(二)　春は草生の草も萌え出でて、朧の清水青みつゝ、汀の櫻散り浮きて、岸の山吹影も濃し。　小野の梢を立ち出でて、音無の瀧に羽洗ふ、山時鳥一聲に、早くも夏と知られけり。　秋は呂律の川に沿ふ、紅葉の色に現れて、比良の峯より吹きおろす、雪に冬こそ來りけれ。

(三)　四季の風情、何れも愚なるはなけれど、何時よりも秋を

四季の風情

(四)別世界の趣

魚山の景色

唐紅の色

幽寂を好む人

ば殊に賞すべし。　春の興には心も浮き立ち、秋の哀には思も沈む。　彼は賑かなるに趣ありて、此は寂しきに味あり。都を出でてまづ大原に來れ。　いかに心寂しく、地の底に沈みたるが如き感あるよ。

(四)　地幽なれども都を去ること遠からず。　都近けれども別世界をなす。　わけて紅葉の色はえたる魚山の景色は格別にて、梢に囀る幽鳥も醉へるが如く、下を流るゝ溪流も、唐紅の色をなす風景は、昔も今も變らざりけむ。　されば世を憂き人、さらでも幽寂を好む人は、古より多くこゝに閑居したりき。

第三　美術類

六　平安朝の繪畫

(一)佛教の感化
彫塑
(大正十一年、專門、繪定試驗問題)
形式美
形相の具足
七寶莊嚴
鳳凰堂
(二)清淨の世界
龍頭の舟
笙鼓月に冴え
頻伽の袖
極樂淨土

(一) 我が國の美術に於ける佛教の感化の甚深なることは多言を要せず。而して奈良朝の彫塑が、概して佛像なるが如く、平安朝の繪畫も、概して佛畫の外に出でず。思ふに平安朝の如く、形式美を偏重したる時代は、他に類例を見ず。佛教も亦形相の具足によりて、內心の信仰に近づくべしとしたり。法成寺・法勝寺の如き、今廢墟をだに存せざれども、金堂・講堂、七寶莊嚴天を摩する大塔、虹と曳く廻廊、すべて一代の工を盡しし狀態は、歷史の傳ふる所、今に存する鳳凰堂を見ても、其の一端を窺ふべし。

(二) 香煙徐に薰じて幢幡を掠め、蓮華頻に散りて轉讀にたぐふ。龍頭の舟は池上に浮びて笙鼓月に冴え、頻伽の袖は庭前に飜りて舞容風に堪へず。恰もこれ居ながらなる極

紫雲の來迎
(三) 畫像の精微
彩華炫耀
乾枯洒脫
(一)禪宗の影響
內容外形
(二)精神的趣味
結跏趺坐

樂淨土、紫雲の來迎を待たずして、身は既に汚濁世界を離る。

(三) かくの如き場に用ふる繪畫なれば、彩華炫耀、丹碧映射、其の色は珊瑚・水晶を碎き、其の線は黃金の箔を切り、或は慈悲圓滿、或は忿怒破邪、十分に濃く、飽くまで鮮かに、精を極め、微を闡きて、後世の乾枯洒脫なる物とは、全く選を異にしたるを想見するに足る。

七　東山時代の繪畫

(一) 我が國東山時代の繪畫は、內容外形共に禪宗流行の影響を受けたるものにして、僧雪舟等その代表者なり。抑〻平安朝の佛寺を去りて、禪刹の門をくゞるや、彼此別天地の感なくんばあらず。

(二) 結跏趺坐して寂靜の境に入れば、物の美醜も眼を遮ら

Yokomura.
Kanyo Miadto Sino

教外別傳
以心傳心

(三)繪畫の特色
蒼枯恬澹

恍惚として吾我を忘る
流風餘韻

ず。一旦其の道に悟入すれば、經典佛像何の要かあらむ。教外別傳といひ、以心傳心といひ、精神を主として形體に泥まず。譬へば、能樂に何等の背景を設けずして、而も能く雲煙萬里の情趣を偲ばしむるが如し。

(三) 繪畫も之に同じく、色を棄てて筆に託し、巧を抛ちて氣を驅り、蒼枯にして恬澹、破墨一掃して遠山を作り、禿筆數行して樹石を成す。一見すれば兒戲、熟視すれば神工、益〻味うて益〻趣あり、恍惚として吾我を忘る。卽ち東山時代の特色にして、流風餘韻延いて近代に及びたるなり。

廣廣廣

名著國文選　終

大正十年十月五日印刷
大正十年十月八日發行
大正十年十二月廿二日訂正印刷
大正十年十二月廿五日訂正發行

大正十一年一月十日
文部省檢定濟
中學校國語教科書

不許複製

名著國文選
定價金四拾錢
昭和四年度臨時定價金六拾六錢
昭和五年度臨時定價金六拾五錢

著作者　東京市外代々幡町幡ヶ谷十番地　佐藤正範
發行者　東京市神田區北神保町十三番地　來島正時
印刷者　東京市牛込區市ヶ谷田町一ノ一九　甲斐元太郎
發行所　東京市神田區北神保町十三番地　山海堂出版部　電話四谷五四五六番　振替東京二一六九一番
賣捌所　各地書籍店

廣陵中學校

五年四組 住田壽夫